

# 学術情報センター ニュース

## OCLCの現状と将来

—特別講演会記録—

日時・場所 昭和61年5月9日 東京大学附属図書館3階会議室  
講師 Online Computer Library Center  
ローランド C. W. ブラウン所長  
通訳 学術情報センター 内藤衛亮助教授  
主催 東京大学附属図書館/学術情報センター

Oha-yo Gozaimasu ! 今日ここでお話できることを大変光栄に存じます。東京大学、特に山崎館長と田中部長と学術情報センターの御好意に感謝いたします。学術情報センターは、3つ目の名前だとのことですが、オンライン・コンピュータ・ライブラリー・センター(OCLC:オーシーエルシー)も現在、3つ目の名前です。今日はOCLCの将来、また、図書館情報システムの世界的な規模でのネットワークの展開についてお話したいと思います。

### 1) 発展の経緯

そもそもの初め、OCLCが出発した時の目的から始めたいと思います。OCLCは、およそ20年前にオハイオで始まりました。図書館員が始めたと考える人もいますが、実は大学の学長達関係者が始めたのです。非常に簡単かつ革命的な考え方で始まり、オハイオ州内の大学図書館が何らかの機械化、コンピュータ化によって目録作成、収集、資源の共有その他の図書館の活動全体を協力的に進める構想を実現しようという考えであります。学術情報センターの前身である情報図書館学研究センターのように小さな部屋で、オハイオ州立大学の小さな部屋で始めました。現時点の学術情報センターと同じような小さな規模でした。幸いにもOCLCは成長できて、オハイオ州の40機関から出発し、現在は米国

内の50州と海外30ヶ国にもサービスしています。メンバーの数が5,100, さらに図書館の数が5,000となり、合計約10,000の組織に直接、間接にサービスしています。

今までの年月の間に、OCLCの目的は変わらずにいます。ひとつは、協力によって収集作業、目録作成作業などに要するコストを上げないという目的、もうひとつは、資源共有を進めることです。つまり、世界中の図書館のユーザーに対して最も効果的、経済的そして実際的な方法で資料を提供することです。OCLCは利益を求める会社ではなく非営利組織であり、会員制の組織構造のもとに理事会によって運営されており、営利企業とは異なっています。

データベースの内容、種類などのすべてが国家的な規格に合致したものです。現在のところデータベースの量は1,340万件、9ヶ月ごとに100万件のレコードが増えるという成長です。データベース・レコードの70%は会員図書館入力のものであり、その他の30%はナショナル・マーク・レコードすなわち米国議会図書館(LC)、英国図書館その他の国家的なマーク作成機関が作成するレコードです。言語の区別では、70%が英語文献、残りの30%が英語以外のものですが、言語の種類総計は316種類程になります。ただし主なる言語は、12種類程です。過去数年にわたって中国語、日本語、韓国語(CJK)に投資を継続しています。これは、アジア関係の優れたコレクションを持つ図書館と協力を進めており、次の数年にはCJK資料のデータベースが大幅に増えることを期待しています。

## 2) RLIN, Utlas, WLN との比較

OCLCと同様、国内的、国際的な幾つかの書誌サービス・システムのひとつに研究図書館グループ(RLG: Research Libraries Group)とそのシステムであるアーリン(RLIN)があります。アーリンは、約30程の研究図書館、大学図書館にサービスしています。その内の幾つかはRLGとOCLCを利用しています。OCLCとRLGは協力して共通のサービス対象である米国内の研究図書館がRLG、OCLCの、いずれのデータベースであろうと区別なくアクセスできるようにしようとしています。もうひとつの書誌サービス・システムにアトラス(Utlas International Canada)があります。アトラスはトロント大学から出発して、インターナショナル・トンブソン社に買収され、現在は商業データベースとなっています。アトラスの場合は主にカナダで稼働していますが、日本や米国内の図書館にもサービスしています。さらにもうひとつ、現在ウェスタン・ライブラリー・ネットワーク(Western Library Network)として知られている(従来はワシントン・ライブラリー・ネットワークと呼ばれていた米国ワシントン州の)地域的なネットワークがあります。

OCLCは幾つかの点で違っています。まずOCLCは非営利の団体です。さらにすべての種類の図書館に対してサービスしています。すべてのというのは、研究図書館、大学図書館、公共図書館、政府関係の図書館、国立図書館、州の図書館、専門の図書館そして企業、ヘルス・サイエンス、博物館、法律、神学などさまざまな主題領域の図書館にサービスしているので、OCLCのデータベースは、明らかに他のシステムと比べて大きいもので、少なくとも2~3倍の規模になっています。主な理由は、会員数が大きいことです。OCLCの成長の原因、OCLCの特徴となっている重要な点は、相互貸借サービス(ILL: Inter-Library Loan)あるいは資源共有を促進する計画です。OCLCには、1,300万件

余りの書誌レコードに付随して2億3千万件の所蔵レコードがあります。このデータベースに対して会員であれ非会員であれ、ILLのために、資料がどこにあるかを知るために探索できることが、OCLCの特徴のひとつになっています。蔵書がたくさんあるということに注目して下さい。

現在のところ、ILLの申し込みトランザクションの件数は、1日当たり1万件になっていますが、この数は実は氷山の一角にすぎないのであり、OCLCデータベースを探索したILLシステムの結果、何処にあるかがわかれば、実際にユーザーは、例えば自分で行って請求する、郵便、テレックス、電話などで申し込むなどいろいろな形で利用できるわけですから、OCLCのILL件数は、実際にははるかに多い相互貸借の件数の反映であるわけです。1年程前に英国図書館、従来は貸出図書館(BLLD: British Library Lending Division)、現在はドキュメント・サプライ・センター(BLDSC: Document Supply Centre)と呼ばれているところに6台の端末を設置しました。デンマーク、フィンランドの図書館、米国のリンダ・ホール図書館、研究図書館センター(Center for Research Libraries)など多様なサービス機関がOCLCのILLを利用して相互に貸借しています。

端末は7,300台の専用端末、2,500台の電話回線による端末があり、毎日1万台の端末がアクセスしていることとなります。システムの設計能力は、1秒当たり70メッセージ、1日当たり250万件のメッセージを受け入れるという設計仕様になっています。OCLCのシステムは現在、99.5~99.7%の稼働率、5.7~6.3秒のレスポンス・タイムを維持しています。統計をいくつか紹介しましたが、それは重要ではないと申し上げたい。その意味するところが重要です。すなわち、OCLCシステムが大変急激な成長を続けており、また大きなシステムでありながら依然として効果的なサービスを提供していることが重要なのです。OCLCにはさらに雑誌業務のシステム、受け入れ業務、また出版社などへ直接にアクセスするシステムなどがありますが、詳細については他にゆずることにします。

### 3) 国際的な展開

次に、OCLCが国際的に、世界的にどのように展開しようとしているかについて述べます。

現在幾つの特徴的な現象が多くの国、多くの図書館、多くの大学で同時並行で進行中です。それは図書館の機械化それ自体であり、機械化の結果として進行中であることは、目録の適及的な変換に対する要求の顕在化です。従来、目で見ることのできたカードや冊子体の目録を入力しつつあるわけです。この適及変換、適及入力に要する金額は大変巨額なものになっています。OCLCの推定では、米国内の研究図書館の目録カードから適及変換して機械可読化するためには、1,000万ドルから2,000万ドル、英国で1,000万ドルから1,500万ドル、ヨーロッパでも同じ位の金額が必要であろうとみています。OCLCは適及入力の点では、会員図書館にとって大変魅力的です。というのは、データベースの大きい部分、200万件程の書誌レコードが、1,900年以前の刊記(imprints)であり、これを基礎にできるからです。OCLCは適及入力のため、特に米国内、カナダ、ヨーロッパの大学図書館と特殊な手配をして、OCLCのシステムを自由に利用できるようにしています。7つの中核となる図書館、オックスフォード、ケンブリッジ、エジンバラ、グラ

スゴー、マンチェスター、リーズそしてロンドンの大学図書館そして英国図書館などと協定を結び、例えば英国図書館（旧大英博物館）の目録（G K 3）を利用できるようになっています。しかしながらどれひとつをとってみても、稀こう本のすべてが収録されているわけではないので、OCLCは何もないところから始めるという形で作業を進めています。

今年OCLCはフランスの教育省、文化省庁、電気通信省、科学技術省などと協定を結び、ナショナル・システムの共同開発と国立図書館の目録の適及変換の課題、もうひとつがネットワークの課題について取り組みます。雑誌、単行書のためのILLのネットワークを進める内容になっています。適及変換では、パチカン図書館の適及変換についても協議を続けています。またヨーロッパの8ヶ国の国立図書館や大学図書館との協力についても協議しています。1年前から台湾の国立図書館と協力関係にあり、レコードの交換、C J K用3バイトコードと、それを使ったアプリケーションなどの開発協力を進めています。

現在OCLCには900人の職員がいます。900人の職員が持っているデータベースに関する開発能力は、単に技術力ではなしに、むしろ協力関係を種類の違う機関と作り上げることができるというところに特色があるのであり、単に技術水準というだけではないというところに御注目願います。

これまで大きな問題であったこととして、データベースの著作権の問題があります。これについてはOCLC、米国議会図書館、英国図書館など大きなデータベースや書誌データベースを作っているところは、データベースに著作権を持っています。OCLCは、研究教育の目的のために書誌データベースを自由に使えることが大切であると考えてきました。唯一の問題は、会員が入力するそのことが会員にとっては投資になっていること、それがまたOCLCの収入源になっているという側面です。会員のうちの営利機関の会員が、教育関係の会員の寄与したデータベース部分を何らかの評価（反対給付）なしに利用することに関して若干の意見の違いがあったのです。

#### 4) 新技術と機能向上

今年、来年の2年間にかけて約4,500万ドルの投資によって、設備、ソフトウェアを入れ替えます。機能をさらに拡充できる見込みであります。その機能のうちには国際協力のための機能も入っています。これまでのシステムには、高速計算機、高密度記憶装置などの新しい技術を十分に利用していなかったのですが、新システムでは導入しようとしています。OCLCでは、過去数年マイクロプロセッサ、パーソナル・コンピューターなどをデータの流通の手段として導入してきました。ワークステーションにエディットや蓄積の機能を付加してあり、これによって利用者は、ローカル・ソフトウェアのあるインテリジェント端末を利用でき、労働コスト、通信費用などの節約となっています。日本とオランダの技術によって、来年にはCD-ROMから開始して、いずれ書き替え可能な光ディスクなどを本格導入することによってデータベースのローカルな探索ソフトウェアの交換に採用しようとしています。そのことによって現在最大の国際的障害である通信費用の減少、節約ができるでしょう。こうしてOCLCは、大学、研究機関などにとって全く新しいコミュニケーションと、資源共有の世界を築きあげようとしています。OCLCは今、書誌からさらに拡大しようとしています。書誌から離れようとしているわけではありま

せん。現在のところOCLCのシステムは、主題探索の技術をまだ持っておらず、目録専門家向けの目録作成、資料確認システムとなっています。米国内ではすでに研究者が実際にOCLCを使うという現象、つまり図書館以外の所にある端末から研究者がOCLCにアクセスすることが実現しつつあります。この傾向に対応するために来年には主題探索を実現します。ブーリアン演算による探索、プロクシミティ探索、ストリング探索などの機能を実現して、1,400万件のレコードを探索できるようになります。

組織構造を世界的視野で発展拡充し、進めてきたデータベースの構造の強化に加えて、その発展の先にあるものは、利用できる技術の導入という新しい展開です。すなわち図形の処理、データ圧縮、電気通信、光技術などであり、これによって電子的な資料配布（デリバリ）、電子出版、いろいろなブラウジング、探索、配布の方法などを複合して研究者のワークステーションからテキスト（全文）のみならず、図形、地図、ハーフトーンなどの表示も可能にしようという段階を迎えつつあり、OCLCは、その方面に対しても研究開発を進めています。

今まで申し上げたことは、夢のような、大ぶろしきのように聞こえるかもしれませんが。実際それは夢であり、大ぶろしきであるわけですが、OCLCが当初から基本的に公的な目的として掲げてきた目的は、世界的な規模で常に発展しつつある科学的な、文学的な、教育的な知識と情報に対する容易なアクセスと容易な利用を拡大することです。この目的を達成するためにOCLCが求めているものは、経済的に成り立つ、教育のためのインフラストラクチャであり、教育研究のための支援機構です。個人的に信じていますが、現在進行している大きな課題として、情報を利用することが今の社会を変革することになり、情報への公開されたアクセスの如何によって、非常に大きな差異を生ずることになることであります。費用の問題、その努力の繰り返しの可能性など、できるできないということで大きな違いが生み出されてしまうのではないかと恐れています。これは、個人のレベルのみならず、機関そして国のレベルでも発生しうるので。

## 5) 大学図書館への対応

OCLCは非営利共同事業の組織ですが、そのために「義務」として考えていることがあります。すなわち、情報のデリバリーにおいて大きな貢献をしなければならないということです。それは特に教育の分野、しかも人文の世界においては、この分野は等閑視されてきましたが、効果的な情報デリバリーを提供することが大事なことだと考えています。従ってOCLCは教育機関、研究機関、政府機関そして民間企業などと協力を進めることが大切だと考えており、協力によってOCLCのみならずそれぞれが単独ではできないことが実現できるだろうと信じております。

図書館あるいは図書館員は、大きな挑戦（チャレンジ）を、受けつつあります。長年の間、図書館が情報と知識の倉庫として存在してきた、特に、建物的側面に重点がありました。エレクトロニクスの時代になって、その特徴を図書館員が利用できる機会が変化しつつあります。情報に対するアクセスが従来、不可能であったものが可能になり、壁に囲まれていた情報に対して物理的にだけではないアクセスが可能になると考えています。大きな図書館、小さな図書館のいずれもが、すべてこの変化すなわち教育に対する挑戦を今経

験しつつあり、それは教育、情報科学、図書館、コンピュータなどの役割が変化しつつあることを意味しています。

その中でOCLCは、大学図書館関係者から成る委員会に「大学環境下における情報に対する必要性にOCLCのサービスがどのようにあるべきか」と諮問しております。今年の6月に実験を開始します。実験と申し上げているのは果たしてうまくいくかどうか分からないからです。参加者は8つの図書館で、米国内の6つの図書館、これは公共、私立の図書館もあり、また人文に強い図書館、科学・工学に強い図書館もあり、海外からはトロント大学、エジンバラ大学の図書館の参加を得ています。参加者は、それぞれチームを構成して、参加組織である大学の運営担当者、図書館関係者、コンピュータ関係者など様々な種類の人によってチームを構成しています。各チームの課題は、エレクトロニクス、情報、コンピュータなどの機能が、統合的な教育研究過程と、この過程における図書館の役割にとってどのようなインパクトを持っているかを検討することです。

個々の大学に応じて、情報技術がどんな展開になるかが大切になるのは、大学あるいは大学図書館で何らかの技術を買入れた場合に、それがすぐに古くなってしまふ、しかしコンピュータ技術は買い込む、抱え込むわけにはいかないところにあることです。いったん抱え込んだ技術が大学の世界において、依然として情報を利用する自由を保証し、情報を処理する費用を維持できるような形で進めることができるかどうか、一体だれが費用を払うのかなどの問題を検討していく必要があります。

## 6) CJK プロジェクト

話を終わる前に特に申し上げたいことがあります。本日ここに同席のアンドリュー・ワンは、OCLCで10年働いており、特に最近の2年に大きな開発作業を進めています。OCLCのCJKプロジェクトには、現在、米国内の11の大学図書館がテストに参加しており、今週テストが開始されるという状態です。OCLCのCJKプロジェクトでは、マイクロ・プロセッサを搭載した端末が、OCLCのデータベースに接続できるようになっています。翻字（トランスリテレーション）の形でも、現地語の形（バーナキュラ・ランゲージ）でも利用できます。対象とする言語は、中国語の二つの文字セット、すなわち全体文字セットと部分（簡略化）文字セット方式、日本語（修正ヘボン式）、韓国語ではハンチャ、ハングルです。入力方式として5種類、中国語で3種類（タンジェ、ピンインそしてウェイド・ジャイル）、韓国語はマキュン・ライシャワーです。これら5種類の入力方式の導入により、利用者の個々の発音の方式それぞれに応じて入力できるだろうと考えています。OCLCのCJKプロジェクトが進行するにつれて、東亜関係の資料の利用可能性と目録入力の効率が北米、ヨーロッパのみならず、アジアにおいても向上されるだろうと期待しています。そのために台湾との協力を進めてきており、データベースの作成、レコードの交換についてすでに若干の手掛かりが実現しています。その他にハーバード大学のエンチン図書館、トロント大学、カルフォルニア大学（UCLA）シカゴ大学などの協力も進めています。この分野において日本の有力な図書館との協力も期待しています。

### ローランド C. W. ブラウン氏

1923年10月11日、デトロイト生まれ。1964年5月18日結婚、1男2女の父。1947年、ハーバード大学を優等で卒業（B. S.）。1950年同大学より法学士（L. L. B.）を取得。1969年、MIT スローン・スクールで経営管理を専攻。



#### 職歴：

1950—52 counsel, Economic Stabilization Agency  
 1954 staff counsel, Small Business Administration  
 1955—59 counsel, Machinery and Allied Products Institute, Washington  
 1959—70 Dorr Oliver, Stamford, Connecticut  
 1968—70 同上社長  
 1970—80 chief executive officer, Buckeye International Inc., Columbus, Ohio  
 1980— OCLC

## 第1回学術情報センター・シンポジウム開催

去る8月5日、標記シンポジウムを、日本学術会議の御協力を得て、東京・六本木の同講堂で開催した。

とくに今回は、学術情報センター発足記念の形で、「学術情報システムに期待するもの」というテーマのもと、下記のパログラムにより講演が行われた。ここにその要約を紹介する。盛夏にもかかわらず、程よく冷房された会場には333名の熱心な参加者が詰めかけた。

#### (プログラム)

- |             |  |
|-------------|--|
| 10：10～10：30 | ごあいさつ —学術情報センターの目指すもの—<br>猪瀬 博（学術情報センター所長）       |
| 10：30～11：30 | 研究活動と学術情報システム<br>井上 如（学術情報センター研究主幹）              |
| 11：30～13：00 | （休憩）   |
| 13：00～13：50 | 日本文学研究資料と学術情報システム<br>小山弘志（国文学研究資料館長）             |
| 13：50～14：40 | 私立大学図書館の期待<br>津田良成（慶應義塾大学教授）                     |
| 14：40～15：10 | （休憩）   |
| 15：10～16：00 | 知的学術V A Nに期待する<br>福村晃夫（名古屋大学大型計算機センター長）          |
| 16：00～16：50 | 学術情報ネットワークと大学図書館<br>山崎弘郎（東京大学附属図書館長）<br>（司会）井上 如 |

## 第1回学術情報センターシンポジウム報告1

## 研究活動と学術情報システム

学術情報センター研究主幹

いの　うえ　ひとし  
井　上　如

## 1. 『答申』の構成、内容、特徴

昭和55年1月、学術審議会から文部大臣に対して提出された答申、『今後における学術情報システムの在り方について』（以下『答申』と略称）は全4章から成るが、中心となるのは、問題点を分析した第2章とその解決策を提示した第3章で、その対応関係を示したのが図1である。

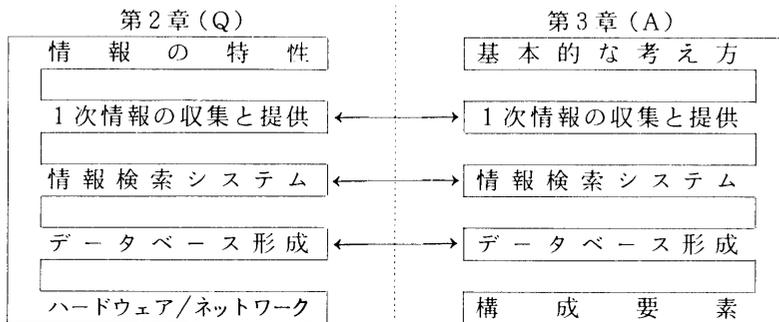


図1 「答申」の構成と内容

ここから明らかなように、『答申』は学術情報の流通における機能上の問題点を、1) 一次情報の収集整備とその提供システム、2) 情報検索システム、3) データベースの形成の3点に整理し、それらに対する解決策を提示するという構成となっている。内容的には更に、『答申』で扱おう情報の特性と、基盤的条件としてのハードウェアと通信網の重要性について第2章で述べ、第3章では解決への基本的な考え方と学術情報システムの構成要素を示している。

『答申』の底に流れる特徴は、1) 学術情報の流通面（蓄積と検索よりも）の重視と、学術研究の諸段階への対応、2) そのための二次情報の（一次情報に対する）優位性の2つに絞ることができる。

## 2. 学術情報システムの構成機関

『答申』に盛られた構成要素は、第1に、ノードの機能を果たす大型計算機センター、情報処理センター、国立大学共同利用機関のグループがあって、データベースへの入力、

オンラインデータベース検索, 各種計算機能を行なう。次に, ターミナル機能を果たす大学図書館や分野別外国雑誌センターのグループがあって, 一次文献の収集・提供, 文献所在情報の形成と利用, 情報検索の窓口としての役割をになう。そしてこれらの各機関が所定の機能を果たすためには中枢センターが必要で, その機能は, 1) システムの計画と調整, 2) データベースの形成とサービス, 3) ネットワーク・システム, 4) 研究開発と教育訓練とされている。図2は, 構成要素とその相互関係を示す図の一例である。

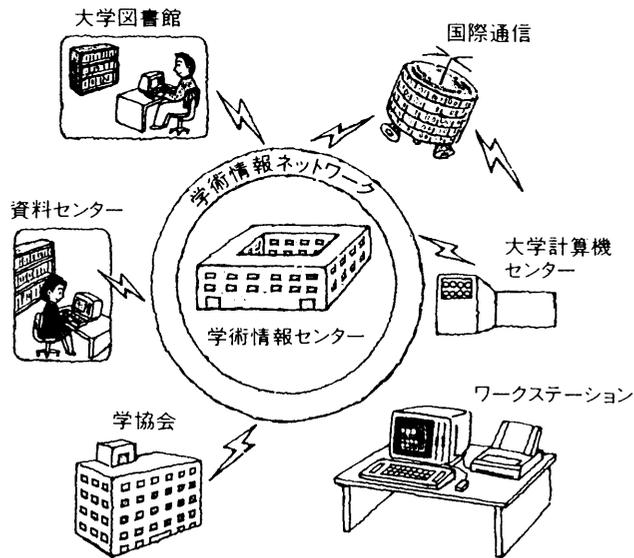


図2 学術情報システムの構成要素

### 3. 研究活動との接点としての情報の特性

『答申』以後, 学術情報システムの設置調査協力者会議と開発調査協力者会議が, 文部省の学術情報課を中心として設置され, 『答申』の実現方法を具体的に検討した。その結果, 先に挙げた『答申』の2つの特徴に加えて, 3) 大学図書館を対象とする目録所在情報サービスから着手すること, 4) ニーズよりもシーズを重視することの2つが, 学術情報システムの新たな特徴として出てきた。

一方, 中枢センターを実現するため, かねてから東京大学に設置されていた情報図書館学研究センターを改組・転換した文献情報センターが, 第1着手としての目録所在情報システムの開発を行ない, そのサービスが軌道に乗りかけたところで, 昭和61年4月, 学術情報センター(国立大学共同利用機関)が, 『答申』にいう中枢センターとして発足した。この時点で, システム開発の方向は, 本来のサービス対象であるエンド・ユーザ向けとなり, 改めて研究活動との接点の模索が開始された。

その手掛かりを, 『答申』に盛られた情報の特性に求めた一例を図3に示す。『答申』では一次情報に対する二次情報の優位性(学術情報システム実現の手段としてであって情報価値とは無関係)を指摘するに留まっているが, 日本学術会議を始めその後の各方面からの学術情報システムへの期待に示されているように, 0次情報, 3次情報の重要性を考

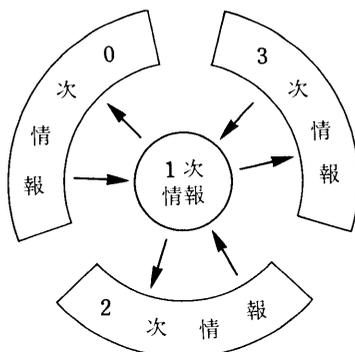


図3 学術情報の特性と対応関係

慮する必要がある。

図3では、一次情報を中心として、その0次、2次、3次情報との対応関係が、それぞれ独自の領域として重要であることを示したもので、それぞれの領域で対応が完了した時、学術情報コミュニティの輪もつながることになる。周知のように文献情報センターは、このうち一次情報と二次情報との対応を確立するところから着手した。

#### 4. 学術情報システムの構造

以上の論旨を踏まえて、学術情報システムは図4のような構造を持つものとして理解される。学術情報システムの目的は、学術情報コミュニティの機能向上にあり、その意味でこれがスープラストラクチャである。一方、学術情報システムの各構成機関は、そのためのインフラストラクチャとなるが、それらが真にその機能を発揮するためには、その更に下部に学術情報のネットワークを踏まえることが必須である。各構成機関の側から見れば、学術情報ネットワークを組むという手段を通じて力を合わせることによって、初めて学術情報コミュニティの機能向上という目的に貢献することとなる。

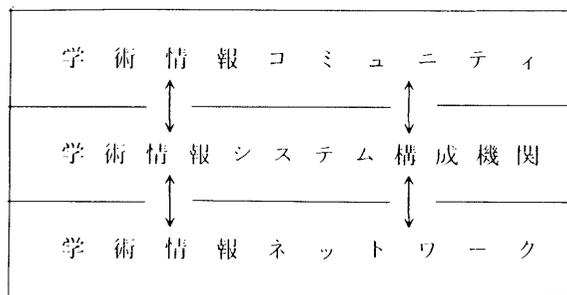


図4 学術情報システムの構造

この構造は、各構成機関のところを任意に入れ換えることによって、固有名詞としての学術情報システムから、普通名詞としての学術情報システムに一般化して理解するための手掛りとなり得る。そうすることによって、海外の事例研究を始め、真に開かれた学術情報システムの検討が開始されるのである。

## 第1回学術情報センターシンポジウム報告2

## 日本文学研究資料と学術情報システム

国文学研究資料館長

小山 弘 志

今日、資料の整理や利用にコンピュータを使うのは当然のことになっている。漢字の使用も自由になった。しかし10年前は、コンピュータで漢字を扱うことがまだ緒についたばかり、その頃から国文学研究資料館（以下『国文研』と略称）は、必要に迫られて、漢字を用いた資料をコンピュータに入力し、これを利用することに努めてきた。本日は、その経験に基づき、『国文研』におけるデータベース形成と、漢字の問題について述べる。

## I データベースの形成

昭和52年、『国文研』にコンピュータが導入され、日立と共同で研究と作業を進めてきた。主たる作成データベースは、『マイクロ資料目録』、『国文学研究文献目録』、『古典籍総合目録』の3つである。

## 『マイクロ資料目録』

『国文研』の中心となる仕事は、江戸時代末までの日本文学関係の写本や版本を、マイクロフィルムによって収集することである。外国も含め各地の図書館や文庫、また社寺や個人所蔵のものを、所蔵者の許諾を得て撮影し、そのフィルムを集めている。現在まで、これらの書目約7万件を9冊の冊子体目録としてコンピュータ組版により刊行し、今、これらをデータベース化して検索利用に供すべく、そのシステム開発がほぼ完了した。

問題点は、1) まず文字を正しく読むこと。活字ではないから、むずかしい場合がある。2) その文字に“カナをつける”こと。音でよむか、訓でよむか。さらに、音・訓それぞれが必ずしも一つとは限られないこと。3) 書名の角書(つのがき)などの処置。角書なしで通行の書名も多い。4) 異名同書や異名同人の場合の対応など。

大田南畝 (一七四九—一八二三)  
幕臣・文政六年歿七十五歳  
名は覃、通称直次郎・七左衛門。  
別号 藤抱先生(狂詩)・四方赤良(狂歌)。  
山手馬鹿人(洒落本)・蜀山人  
風鈴山人・四方山人・滄洲樓・  
巴人亭・杏花園・鷺谷隱士  
など

4) の1例として大田南畝の場合(図1)。彼はさまざまな筆名を用いた。これらを大田南畝で統一することも必要だし、また個別の筆名で検索できるようにしなければならぬ。狂詩・狂歌・洒落本とジャンルによってはほぼ筆名を使い分けているし、また、ある年代以後用いはじめた筆名もあり、それらのわかることが望ましいからである。なお、研究の進展に伴って、ある人物の筆名とされてきたものが実は別人のものであるというようなことも生ずる。それが定説となれば、データベースに修正を加えねばならない。

### 『国文学研究文献目録』

日本文学に関する研究論文は年々増加し、最近では年8千点を超える。近代文学関係のものを含むこれらを整理して、毎年冊子体の目録『国文学年鑑』を刊行してきたが、その一方で、『国文研』発足前のもも加えて、これら研究情報をコンピュータに入力している。目下それをデータベース化して検索できるようにと準備中である。

これにも問題は多い。1) まず採録に際して、対象を専門誌に限定できないこと。例えば、歌誌に万葉集の或る歌についての論文が載るし、文芸評論と研究論文との境い目も判定がむずかしい。2) 検索の便を考えれば、豊富にキーワードを付けるべきである。「源氏物語」の論文が、ただ何百も出て来たのでは利用度が低い。せめて本文批判・成立論・人物論などの分類がほしい。しかし、その作業は極めて困難である。部外の、それぞれの専門の研究者や学会の協力を得て、より良いデータベースにしてゆかねばならぬと思う。

### 『古典籍総合目録』

国書総目録(岩波書店刊)の、いわば統編にあたるもので、昭和55年から仕事にかかっている。国書総目録のカード採集は一応昭和35年で打ち切られているので、それ以後発行された各図書館の目録などを採録対象とする。将来は、国書総目録のデータベース化がはかられて、岩波書店と協議の上、これと統合することによって、江戸時代末までの国書全体の所在目録とすべきものであろう。

問題点は、1) 対象が国書全体で、医書や暦の本もあり、『国文研』の知識範囲を超える分野をも扱わねばならぬこと。2) それぞれ独自に作られた目録の記載に基づくので、各目録の方針の相違により、個々の書誌事項に例えば繁簡などの差があり、そのため、これらを1つのデータベースにすると不統一な点が生ずる。それをどのように調整するか。

## Ⅱ 漢字の問題

J I Sの第1水準と第2水準、計6,353字の中から、“剣”(図2)と“弁”(図3)について一見してみよう。『国文研』では、それぞれ真中の字を基準にしてソーラスを作っている。(字の上はコード番号、下の( )内は大漢和辞典の検字番号。\*印と\*\*印はJ I S外の字)

“剣”は俗字を含めて6字もJ I Sに入っている。人名などの関係で多いのであろう。『国文研』では\*印の2字が将来必要となるかもしれない。\*\*印の(40186)は別字、カッコをつけた2字は“あり得る”字である。“弁”の場合、D1FEとD2A1は同字であるが、それとEDE7、E1A2とはそれぞれ別字であり、意味が異なる。それらが略字「弁」では1つになってしまう。なお、\*印の字は今後必要となるかもしれない。



## 第1回学術情報センターシンポジウム報告3

## 私立大学図書館の期待

慶應義塾大学文学部教授

つ　だ　よし　なり  
津　田　良　成

## I はじめに

掲げた題名にも関わらず、私がこれから述べさせて戴くことは、私立大学図書館員のコンセンサスを得たものでなく、全くの私見である。

学術情報システムの構築には、その主要な構成要素である大学図書館の目的というものが考慮されるべきであろう。そしてそれは一般には次のような言葉で云い表わされている。即ち、『利用者が、何処に居ようと、何時でも必要とする時に、その必要とする情報を、求められている形で提供する。』

ところが、大学図書館の主要な情報源である文献の量は長年にわたって増大し続け、今や蔵書量1,000万冊を誇るハーバード大学のような大図書館でも、自館の蔵書のみでは全ての利用者の情報要求に応じて行くことができず、結局、数多くの図書館で構成するネットワークにも依存せざるを得なくなっているのが実情である。

従って、とてもハーバード大学の規模に及ばないばかりか、国立大学と比べても全般的に蔵書数の劣るわが国の私立大学図書館が、本気でその利用者の情報要求に応じて行くつもりならば、積極的に学術情報システムの形成に協力して、それへの参加を計るのが当然であろう。

事実、既にそのような態度を表明している館も存在するようだが、また一方、学術情報システムに十分な理解を持たない館も相当数存在するのも事実のようである。

## II 私立大学から見た学術情報システム

慶應義塾大学の場合はシステム開発の当初から、それへの積極的参加の意向を表明しており、現に本年4月にこのシステムに接続し、7月には教育用モードから業務用モードの切り替えも行なわれた。

教育用モード使用期間中の館員の反応は、他の既接続館の場合同様次の様な意見や疑問となつて表明されている。即ち、

- ① データベース管理システムに未だバグがあるらしい。利用量が多くなるとマシンがダウンすることがある。
- ② レスポンスが遅い。
- ③ HELP機能が無い。
- ④ 正式なマニュアル類が未整備である。
- ⑤ 典拠ファイルへのリンクづけの作業が効率的でない。
- ⑥ 言語コード、国名コードがやゝこしい。

等々。

そのような疑問に対し、図書館の管理者の人達の意見は次のようである。即ち、

- ① 現在起きている技術的諸問題は、いずれ解決されていくであろう。
- ② 学術情報システムは、米国その他のオンライン目録サービスの諸システムより10年以上遅れて出発しているため、現時点での技術的格差の存在は当然である。
- ③ 欧米の、現行のオンライン目録サービスの諸システムは、その開発当時、一つの図書館の試行錯誤の繰り返しを基に出来上がったシステムであるのに対し、学術情報システムはその段階なしに一足飛びに作り上げているため、細かい点に不十分なところが残っていても当たり前である。
- ④ 学術情報システムが、若し単にオンライン目録サービスのみのシステムならば、私学の図書館は当然、UTLASその他のシステムと比較して、その面での自館の要求に適ったものを選べばよいが、それは広く学術情報サービス全般に関わるシステムの筈であるから、慶應義塾大学としては、長い目でその発展を見守りながら、その活動に積極的に協力してゆくべきである。

しかしこの様な見解は必ずしも一般的ではなく、大学図書館の多くは現在重点的に進められているオンライン目録サービスだけに注目して、規模の大きな大学図書館にとっての泣き所である目録作業の滞貨の解消と、その作業の軽減にのみ期待を寄せているようである。

確かにこの態度は非常に近視眼的で改められるべきだが、その点の図書館現場での重要性を学術情報センター側も十分に理解して、対処して戴きたいと思う。

さて、私立大学図書館の立場で学術情報システムを見る場合、幾つかの取越し苦労とも思われる疑問点があげられよう。例えば、システムに直ぐ参加できるレベルにまでコンピュータ化の進んでいる図書館が国立に多いとは云え、私立大学で参加させて貰っているところが少な過ぎるのではないか。とか、学術情報センターの仕事の重点が研究開発から日常のオペレーションへと移行した時に、研究者が主体の学術情報センターが問題なくその変化に応じて行けるだろうか。とか、従来から組織的な図書館間相互貸借を積極的に行なってきた経験の少ないわが国の大学図書館が、例えオンライン目録サービスのおかげで文献の所在を確認できて、果してそれをILLサービスに結びつけてゆけるのだろうか。とか、同様に、レファレンス・サービスも余り活発とは云い兼ねる日本の大学図書館が、学術情報システムの提供する情報サービスを、本当に十分に活用して行けるだろうか。などがそれである。

### III 結 論

この学術情報システム全体の構想は、現在既に活動しているサブシステムや、今後行なっていくとして行こうとしているサービスその他のサブシステムを考えた場合、それら個々のサブシステムこそ欧米のそれに比べて十数年後発であるとは云え、それらを一つのシステムに統合しようとしている試みは壮大なものであり、またユニークなものであると云えよう。それだけに、そのシステムの中心機関である学術情報センターも、その主要構成メンバーである大学図書館やコンピュータ・センターも、次のような点を十分に考慮に入れて今後の発展に努めて戴きたい。

- ① 学術情報システムは、その構成員としての大学図書館の積極的な参加協力なしには存在し得ないが、同時に、今後の大学図書館は学術情報システムの支援なしにはその責任を満足に果して行けないであろう。
- ② 学術情報システムは、その技術的な面のみがいくら上手に形成されても、その中身を形作る大学図書館の利用者サービスに対する態度が積極的であり、その質が良くない限り本当に十分な効果は期待できないであろう。
- ③ 今後この学術情報システムが一人前に育って行くためには、膨大な労力と巨額の資金の投入が、将来の知識と技術の発展を考慮に入れた賢明な相取りと共に必要であろう。そのためには、学術情報センターに対する、大学図書館やコンピュータ・センターのみでなく、研究者を中心とした利用者達の積極的な支援態勢を形成してゆくことが必要であろう。
- 今このシステムが満足に育たなかったならば、学術情報活動で一步も二歩も先を行っている米国その他の国に追いつき、これを追い越すによりチャンスを失うことになり、その損失は非常に大きなものとなる。

#### 第1回学術情報センターシンポジウム報告4

### 知的学術 V A N に期待する

名古屋大学大型計算機センター長

ふくむらてるお  
福村晃夫

#### 1. 情報の蓄積とコモニュース

電子技術に支えられた情報の伝達、処理技術の高度化の影響は、例に洩れず、全国共同利用大型計算機センター群（大計群という）にも現れた。全7センターのコンピュータシステムがこなす仕事量は、10年間で40倍という増加を示した。また、システムの使用形態は、昭和55年ころを境にして、遠隔地使用型（TSSとRJE）に変わった。さらに着目すべきことは、システムの仕事量の増加割合に比して、プログラムの本数の増加割合は約7倍に止まるということである。このことは、年とともに、1本のプログラムによるコンピュータの仕事量が増大することを意味するが、その原因は、補助記憶装置内の大量のソフトウェア・ライブラリやデータベースを、プログラムが多用するためである。実は、このことがコモニュース（共同利用）の醍醐味であり、学術情報センターや大計群が、学術情報の巨大蓄積体としての意義をもつゆえんである。

#### 2. パーソナルユースとネットワーク

おそらく、多くの道具はパーソナルユース（個人使用）のものだろう。それが、経済性その他の理由で共同利用になるのだが、個人使用の魅力が忘れられるものではない。その意味で、パソコンは作られるべくして作られたといえるのだが、情報は伝達されてはじめて意義をもつから、パソコンや個人使用の端末装置が、他の同種の機器と関係がとれるようにするのは、これも、人間の情報活動に照らせば当然ともいえることである。つまり、

ネットワークを構成し、そのノードをコモンあるいはパーソナルユース方式にしておけば、種々面白味のある使用法が考えられる。学術情報センターをこのような視野で眺めてみたいし、また、その大計群との係わり合いも、この観点でとらえることが望ましい。

### 3. V A N

VAN (Value Added Network) という概念が、数年前にわかに浮かび上がって来たが、その実現の技術的難しさは別として、考えようによっては、これも当たり前の概念である。はじめに、情報の伝達、処理技術の高度化を述べたが、これら二つの機能の一体化は、人間がそうであるかぎり自然である。まして、磁気ディスクを主体とする、入手可能な記憶容量の増大に加えて、光ディスクの参入を考慮すれば、ネットワークの各ノードにおいて情報の伝達、処理の機能に、さらに蓄積管理の機能を加えて、高水準に統合化をはかる可能性が出てくる。

ネットワークは、それ自体は鉄道や航路に等しい。荷物の送り出し地から届先地までを、貨物列車がただ突っ走るときの鉄道の使われ方は、旧来型のネットワークのそれに似ている。同じ鉄道でも、列車を随時停めて買物や見物を許すように使うことができる。ネットワークも同じように、そのいくつかのノードで情報製品が受けとれるように使うことは、統合化された情報技術によれば可能だろう。これがVANであり、学術情報も情報製品だとの理由で、学術VANという言葉ができた。

### 4. 物の技術と心の技術

VANの店で買物をするにも、客に見えるのは端末装置のブラウン管面だけである。これは、カウンター1つに店員1人の店先のようなもので、たったそれだけの空間で品定めをし、注文をしなくてはならない。というよりも、問題が情報製品のことだから、対応の相手の面積を、人間の顔のそれより、それほど大きくする必要はないというべきだろう。なぜなら、人間自身は、顔対顔で情報交換をしているのだから。つまりこのことは、端末装置が人間の顔に見えてくるように工夫しなくては、ネットワークの高度利用につながらないことを意味する。だがこれは、より多く、より速く、より正確にという、従来の“物”の技術の尺度では測れない領域のことのようである。もし心の技術というものがあれば、その成果をこそ期待すべきであろう。学術情報センターには、そのようなものも期待したい。

### 5. 字は情報の包装紙か

従来の技術は、種々の局面で人間の機械的作業を支援してきた。これに対し、心の技術の領域で、人間の知的作業を支えるものは無いかというと、最も根源的なものとして言葉と文字がある。後者についての技術的革命ともいえることは、15世紀の印刷技術の発明である。だが当時の活字は、手書きのニュアンスを残すように作られている。わが国の版本はもちろん手書きであるが、明治の初期の活字は、やはり手書きの姿をとどめている。これが、いつしか、いまのスタイルの活字に変わり、また、顔立ちが意味を持つ漢字に、カナがとって変わった。印刷界では、第2次革命ともいべきコンピュータ印刷が普及しつつある。字は情報そのもののように思われたのだが、いまは情報商品の包み紙の感が強い。情報の品位を落とさぬように字種、字質を維持すること。これも、学術情報センターにぜひお願いしたいことの一つである。

## 6. 無構造の中の構造

いまの情報技術は言語操作（等価的にコンピュータ操作）を主軸にするから、言語の威力がその抽象性にあることを知る必要がある。ネットワークは、拡散と吸収の両作用で一様化の原因となった。文化の地域的一様性は前者、汎用データベースにみられるデータの一様性は後者の作用を受けている。一様なデータの集合は表面的には構造を持たないから、そのままでは雑多である。だが、ある視点からこれを眺めれば、その一部が構造を持ち、これを数語で特定化できることに気付くだろう。これが抽象であり、このとき言語は意義をもつ。

図書館に集まる文献情報は、それなりの分類法で整理されているであろうが、その多量さからして、個人からみれば無構造に等しいであろう。もし図書館がV A Nの上での情報ショップなら、顧客に丁寧に応対する必要がある。そのためのノーハウは、顧客の視点から文献情報を眺め直すことで得られるだろう。つまり、個人の文献像を通して文献集合の一部を構造化し、特定化して切り出して来ることになる。この文献像は、知識工学でいう知識ベースに収められることになるが、一様性、多量性、あいまい性を克服して、多様なものの個々に対応するためには、この種の“知的”な手法が不可欠となるであろう。

## 7. オンライン検索の試み

知的学術V A Nに期待されるものの具体例に、知識工学のオンライン検索への適用がある。データベースや質問項目の選択や、検索方略の質問に答えるコンサルテーション・システムが考えられるが、「知識は人と物を食う」という事実は重要である。知的なV A Nの実現には、ハード・ソフト両面でのさらなる技術の向上が必要だが、なにはおいても、人と物の投資が受けられることを祈念してやまない。

### 第1回学術情報センターシンポジウム報告5

## 学術情報ネットワークと大学図書館

東京大学附属図書館長

やま さき ひろ お  
山 崎 弘 郎

### 1. はじめに

まず、大学図書館が今後果たすべき役割と克服すべき問題点を学術情報ネットワークとの関連で示す。次に、変りつつある図書館の現状と具体的課題とを述べる。それらの事業を背景に、大学図書館から学術情報センターに対する要望を次の三点に集約する。

- (1) サービス機能を拡充してセンター機能の有効性を実証する基礎を固められたい。
- (2) 共有を意識させない資源共有システムを目指してほしい。
- (3) システムのアセスメントが大学と相互かつ協力的にできる仕組みが必要である。

## 2. 大学図書館の問題点と情報処理、通信技術による情報メディアの多様化

図書館は大学の研究と教育のために必要な情報を提供する大学の情報センターである。そのセンター機能が、データベース、知識ベースなど学外にまで多元化多様化しつつある。学術情報システムは、その傾向に最も手を貸すことになる。

図書館の機能は、情報の収集、保存、利用の三機能に集約できる。

収集とは情報の空間的移動（伝達）、保存とは情報の時間的移動（伝達）とみることができる。利用は情報の活用について利用者とのインターフェイスとみなせる。

基本的機能である収集、保存、利用の各面で、図書館は次の難問をかかえている。

- ・学術情報の増大に対応する文献収集の経済的困難。
- ・保存のための空間の不足。
- ・利用サービスのための要員の不足と増大する情報の管理の困難など。

電子技術が今やこれらの問題点の克服に大きな貢献が出来る。

すなわち、情報の空間的移動には通信技術により、また、情報の時間的移動には電算機の高密度の記憶能力と高速処理機能とを活用して、時間短縮、省力化、省空間が可能である。また、検索や貸出返却などの利用サービスにおける電算化による高速化、省力化については言うまでもない。

したがって電算機の情報処理能力と広域通信システムとを結合したコンピュータ・ネットワーク・システムは、大学図書館にとって問題解決のための強力な武器であり得る。

電子技術は紙を媒体としない情報の伝達や保存を可能とした。しかし、それだけ人間と機械のインタフェースの重要性が増大したことを忘れてはならない。データベース、知識ベース技術の発達著しい。さらに人工知能（AI）の進歩とともに知識ベースはフレキシブルで即時性に勝れた情報センターに成長しつつある。情報の大量伝達保存手段としてゲーテンベルグ以来の紙と活字による方式が多様化の挑戦を受けている。

## 3. 総合大学における情報資源の集中と分散

歴史が古く、多数の部局図書館に資源が広く分散する東大図書館では固有の課題がある。すなわち、中央図書館と部局図書館の役割分担の最適化である。総合大学における文献資料の分散化傾向は、各学部研究所の創立の歴史と研究者の都合が優先したものであるが、今では総合大学の特徴である総合性を阻害している様に思えてならない。そこでは、研究と教育のための共有資源として集中化による高効率運営が図られると同時に、専門研究者の便宜を両立させねばならない。ここに学内に学術情報サブシステムのニーズが存在するわけで、東大の図書館電算化システムは正にそのようなシステム構造を持っている。

コンピュータネットワークは広いキャンパスに散在する図書館間の空間的制約をとり除き、高速度の処理により情報資源へのアクセスの負担が時間と空間との両面で大幅に減らし得る。所在情報の共有と重複を避けた学術情報資源の適切な分散と集中とにより、研究者と図書館との双方に対して研究と教育のための新しい空間と時間とを生み出すと同時に、総合大学の総合性が回復されることが期待されるのである。

学術情報システムにとってまず大切なことはデータベースの内容充実である。重要なのは、過去のカード形式の目録をコンピュータ検索可能とすること、すなわち、遡及データ変換である。この実現により永年のカード目録の問題点が解決されるから、研究者か

ら実現について非常に強い要請がある。しかし、500万冊を越える入力とは通常の業務の範囲外である。特別のプロジェクトとして進める予定である。

カード目録の遡及変換の際、古い本の入力で新書の資料と全く同じ項目を入力するのは多くの困難がある。また、利用頻度を考慮してコストパフォーマンスを配慮すると多少の省略を許容する入力方式が用意されなければならない。

なお、入力の装置についても、手書き文字読取システムなど省力化のための新しい技術の進歩を期待できるのではないだろうか。学術情報センターと協議し、遡及変換を実現させたいと考えている。

#### 4. 大学図書館から学術情報センターへの要望

##### 4.1 まずシステムの基礎を固める

学術情報システムの土台は目録データである。巨大な水道システムを構築しても貯水池に水がなければ無用の長物にすぎない。

電話システムにたとえるならば、まず、全国即時通話を可能にしてから、テレビ電話やキャプテンシステムにすすんでほしい。

そのために、ネットワークの普及をはかり、研修教育などにも力を注いで頂きたい。また、DBの更新、updatingの迅速化などが望まれる。ただし、システムの研究は別である。学術情報センターにおける研究とサービスの機能の区別の明確化あるいは組織的調整が必要ではないだろうか。

##### 4.2 共有を意識させない資源共有

学術情報システムの基本思想は資源共有ということであろう。共有は有限な予算や空間の様な資源を有効に活用するための方策であるが、利用者の立場では専有する資源がより便利であることに変わりはない。そこで、マクロには共有だが、ミクロな視野には専有にみえるシステムが望ましい。

本来、TSSの出発点は、利用者一人一人がコンピュータを専有している様に使いながら、一台の機械の資源を多数の利用者が共有できるシステムが目標であった。

大学からみて資源を専有しているか見えながら、実際は共有しているわけで、共有を意識させない共有が最もまじい状態といえよう。そのためには、なにが必要か。

まず、センターの機械が高性能でなければならないのは当然だが、マンマシンインターフェースの特性が特に重要である。また、利用者が同時にアクセスしている他の利用者を意識しないためには、バッチ方式も含めたフレキシブルなサービスも有効であると思う。

##### 4.3 大学図書館と学術情報センターの相互アセスメント

目録システムが適正に運用され、利用されるために、ユーザである図書館側の実務的アセスメントを取り込む仕組みをセンター側に考えて頂きたい。

全国で95にもものぼる国立大学図書館を横断的に組織した国立大学図書館協議会の中に今年から学術情報システム特別委員会が組織された。大学図書館に今後大きな影響を与える問題として、全体としての対応、実施上の問題点などを検討する予定である。

この委員会の役割の一つは、学術情報システムに対する図書館側の意見や要望を個々の図書館や館員が個別的に示すだけでなく、それらについて適切な自己評価やアセスメントを行い、ユーザ群としてのセンターに対するニーズを集約することである。

このような形でセンターと図書館との組織的な連絡、調整の場が出来、それがセンターの運営に貢献することを期待する。

## 学術情報ネットワークの整備計画の概要

学術情報センター助教授

あさ の しょういちろう  
浅 野 正一郎

### 1. はじめに

学術情報センターが担当する業務の重要なものに、学術情報ネットワークの整備がある。これは全国に散在する図書館や計算機センター、さらに全国の研究者が所有する端末機やパソコン等を相互に接続するデジタル・ネットワークを構築し運用することである。

特に、ネットワークの実現は、学術情報センターの目録処理機能や各種のデータベースの検索機能を全国から活用するための共通手段となるものであり、その重要性は極めて高いと認識されている。加えて、ネットワークには研究者相互の学術交流を図るのに有用な電子メールの機能や、図書館等に所蔵される図書あるいは雑誌などの一次資料を流通させるためのファクシミリ通信機能が同時に整備されることが計画されている。これにより、全国の統一目録が作成されるだけでなく、データベースに蓄積されている学術二次情報に始まり一次情報の活用に至る一貫した情報利用が可能となる。ここでは、この学術情報ネットワークの整備計画の概要について説明してゆく。

### 2. 学術情報ネットワークの概要

学術情報ネットワークは以下に述べる骨子に従って整備を行なってゆく。

- (1) 学術情報システムに関係する全国の学術研究者や大学職員に対して、低廉かつ包括的な情報提供や情報流通を実現するために、自営のネットワークを構成しこれを維持・運用してゆく。
- (2) 今後実現される多様な情報活用の基盤となるネットワークとするだけでなく、既存の大学・研究機関の間に構成されている大学間コンピュータ・ネットワークを収容する統一的、ネットワークとして整備してゆく。
- (3) 情報活用の基本となる高度な通信利用が可能となるよう、配慮してゆく。この通信利用には、データの転送だけでなく、画像・図形・音声などが同時に取り扱われるようなマルチメディア通信機能がふくまれる。さらに電子メール機能や電子掲示板機能、コンピュータ会議機能などはひろく通信処理機能とよばれるが、これらについても早期に整備を図ってゆく。
- (4) このために、電気通信事業者が提供する高速デジタル伝送サービスを活用し、パケット交換機・マルチメディア多重化装置等を導入して大容量の通信ネットワークを実現する。さらに、学術情報センターの内部に通信処理システムを新たに構成し、これにより通信処理サービスを全国の利用者に提供してゆく。
- (5) 整備計画の第一期は昭和61年度から4年を予定し、北海道から九州に至る全国にネットワークを拡充してゆく。さらにその後、第二期を予定し、NTTのINS（高度情報ネットワーク）で活用するであろう先端技術を備えたネットワークに高度化することを

計画する。

今年度はその初年度であり、文部省学術国際局学術情報課と連絡を密にとりつつ計画を進行している。

### 3. 本年度の整備の概要

本年度は、学術情報センターに大容量パケット交換機を導入し、これにより

- ・学術情報センター
- ・東京大学
- ・京都大学
- ・大阪大学
- ・名古屋大学

の相互を接続するネットワークを完成させる。各大学には、パケット多重化装置(PMX)と呼ばれる小容量のパケット交換機を同時に設置し、これにより各大学の図書館のコンピュータ、大型計算機センターのコンピュータ等を収容してゆく。

図-1には実線で本年度のネットワーク構成を示している。尚、次年度には、大型計算機センターが設置されている全国7大学に接続を延長してゆく。これにより全国の主要な情報資源がネットワークに接続され利用されてゆく。同じく図-1に破線で次年度の拡張がしめされているが、この他の主要拠点にもネットワーク設備を導入してゆく。4年間にわたる整備が予定通りに進行すれば、全国20以上の拠点に設備を有するネットワークが完成することになる。この規模は商用のネットワークに肩を並べるものといって過言ではない。

図-2には、本年度のネットワーク構成の詳細を示している。各大学の間は、384 Kb/sの高速デジタル回線で接続されている。この回線は、複数の通信に共用される。このためにマルチメディア多重化装置(DMIX)が各所に設置され、回線の分割使用を実現する。当面デジタル回線は、事業実績の高いNTTの回線を利用してゆく。また、ネットワークの拡大に伴って回線の容量を増大してゆき、近い将来には1.5 Mb/sや6 Mb/sの回線が区間的に使用されてゆく。

### 4. 学術情報ネットワークの利用法

図にも示した通り、学術情報ネットワークには図書館や大型計算機センターあるいは情報処理センターが接続される。大学の研究者等は、これらを経由してネットワークを利用することが通常となる。この際、センター間を現在相互接続している大学間コンピュータ・ネットワークが活用できる。この概要を図-3に示している。尚、当面の整備計画に含まれない大学であっても、最寄りの多重化装置まで接続する回線を手配することにより、ネットワークに参加することが可能である。

現在学内ローカル・エリア・ネットワーク(学内LAN)が徐々に整備されているが、これらの学内LANが学術情報ネットワークと直接接続されることも計画され、検討されている。この際には、LANに接続している端末やパソコンから直接ネットワークに情報を送出することが可能となり、より自由な相互通信に活用されるネットワークとなる。

大学の間にはファクシミリの通信が増大してきているが、学術情報ネットワークはファク

シミリ通信にも活用できる。これを、より使い易く実現するために、電話通信をも同時に可能とする高速ネットワークを一方で検討している所である。

## 5. 終わりに

学術情報ネットワークの概要について説明してきたが、今後の年次進行には未定の部分が残されているのも事実である。今後も折りにふれ、状況を御報告してゆく。

学術情報ネットワークが全国の利用者の皆様に利用されてゆくことが、このネットワークを拡大し今後の学術研究の基盤としてゆくことにつながる。また、同時にネットワークを海外にまで拡大し、学術交流の国際化の手段としてゆくことにもつながる。学術情報センターでネットワークを担当する全ての者は、一丸となって努力を続けて行く所存である。皆様の御支援を切望すると共に、ネットワークの高度化への御意見が載けることを願っている次第である。

さらに、学術情報ネットワークを運用し維持してゆくためには、機器を設置する全国の大学の関連部局の御協力が不可欠である。今後、少なからぬ困難に出会うこともあるがこのネットワークの目的が円滑に達成されるよう御支援をお願いする次第である。

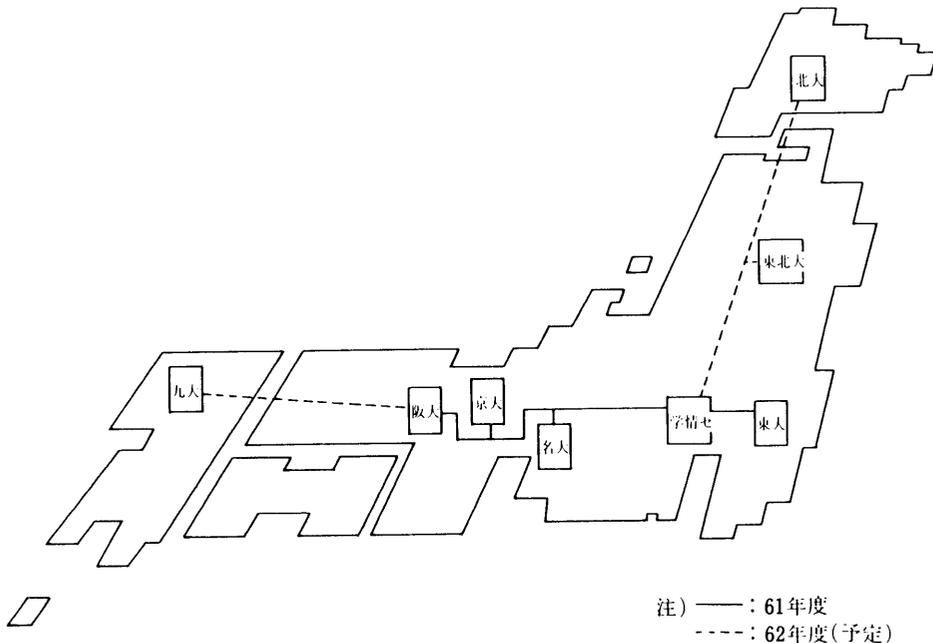


図-1 61年度、62年度回線構成



## 情報検索システムの開発状況

学術情報センター教授

ね ぎ し ま さ み つ  
根 岸 正 光

### 1. はじめに

学術情報センターでは、来年度当初から研究者および図書館員を対象とする情報検索サービスを実施するべく、目下各種の研究開発を進めている。開発の項目は大きく2つに分けられる。すなわち、これまで大型計算機センターで行われてきたのと同等の利用者登録・課金処理など、一連のシステムの開発がその一つであり、またサービス対象となる各データベースについての情報検索システム自体の開発がもう一方の項目である。利用者登録関連のシステムは、これまでオンライン共同分担目録システムに参加する図書館という機関利用者を前提とした独自のシステムを開発・運用してきたが、来年度からはこれに加えて、研究者等多数の個人を対象にする登録関連システムを稼働させることになる。この場合、本年度から実施された大型計算機センター間の共通利用番号制に則ることになるので、当面、東大・大型計算機センターの支援を仰ぎつつ、開発を進めている。情報検索システムについては、既定のとおり、TOOL-IR/ORION に準ずる仕様にて設計・開発を行っており、この面では東大・大型計算機センターおよび図書館情報大学にて稼働中のシステムを参考にし、可能な場合はその一部を移植応用するという方法で開発の効率化を図っている。

本稿では、こうした情報検索システム開発の現況のあらましを紹介してみることにする。

### 2. プロトタイプینگ

外部から購入したデータベースをオンライン情報検索システムに乗せてサービスするのは、案外手間のかかることである。まず各々のデータベースについて、内容的に相当の理解を深める必要がある。データベース中の各項目の内容について、さ程立入らなくても、とおり一遍の検索システムを作成することはもちろん可能であるが、こうしたものは多くの場合利用者からみて甚だ使いにくいものになってしまう。情報検索システムの基本的機能、いわばカタログ性能的なものは、どのシステムでも大差があるわけではない。利用者からみて使い心持がよく、本当のいみでの実用性の高いシステムは、データベース各々の内容とその利用態様に密着したきめ細かい気配りの集積によってこそ実現されるというのが筆者年来の考えであるので、データベースの内容把握には相当の力を注ぐ方向でシステムの開発にあたりたいところである。この場合、各項目別の出現頻度、くり返し数やデータ長の最小、最大、平均等の統計調査だけでなく、各項目に実際にどのようなことがどのような表記法で書かれているか、またそれらにはどのような類型があり、例外的なものはどのような体裁の記法で、どの程度の頻度で出現するかなどのことをきちんと把握しなければならない。これを利用者の検索要求（それ自身不確定ではあるが）と突合せ、また技術的可能性も考慮して、検索システムの仕様を設計することになる。

ところで、上記のような設計手順を本格的に展開するには、かなりの困難が伴う。まず、データベースの内容把握に関してみると、通常データベース作成者から供給される仕様書の類は上のような目的には到底不十分である。ケミカル・アブストラクツのように、データの詳細に亘る大部の仕様書を準備しているのは全くの例外といってよく、多くはただか数ページのにわか作りと思えるドキュメントが添付されているにすぎない。データベースとはいうものの、要するに抄録誌印刷に至る中間工程のファイルを単に別売りしただけという体裁のものが多く、作成者自身において上述のような、オンライン・データベース化に向けての諸規約、諸情報を必要とせず、また実際そのような経験も持合せていないという点に、これは起因していると思われる。従って、このような場合、作成者側に種々の問合せをしても、質問の意義、目的からして理解されず、有効な回答が得られないのは当然かも知れない。考えてみれば、大型のオンライン検索システムを設計、開発、運用するなどは、ごく限られた機関での仕事であるから、上述のごとき状況もやむを得ないものとしなければならない。

従ってデータベースの内容把握には、ともあれ現物に即した「実態調査」が必要ということになる。これには、ダンプ・リストを出力して内容を点検するのが基本になるのではあるが、数万件を含むデータベースに対するダンプ・リストでの網羅的点検などおよそ非現実的であり、これはサンプル・チェック的に行わざるを得ない。ところが先に記したとおり、オンライン・データベース化にあたっては、例外的データ、少数例についても正確に把握した上で設計を進める必要がある。このことは「実態調査」用として、かなり効率的な検索システム、いかにいえばオンライン型の検索システムがなければならぬということを含みしている。とすれば、オンライン検索システムを設計するためにオンライン検索システムが必要であるという循環論法に陥って、仕事が進められないことになる。この種の問題は、一般企業において電算化対象業務が定型大量処理から非定型処理へと拡大してきた近來の状況の中でもいわれているところで、仕様の確定→プログラムの開発という従来型のシステム開発方式に代わって、プロトタイプ・システムをまず開発し、その試用、改変・拡張をくり返し徐々に本格システムに到るという、プロトタイプ方式が採用される方向にある。

今回の情報検索システムの開発にあたって、この考え方によることとして、プロトタイプのためのいわば暫定仕様を設定してプロトタイプ・システムを開発し、各データベースとも1万件程度の文献レコードをオンライン化して、多角的検索が可能な状態にした。これにより、上述の実態調査が可能になるとともに、次にのべる研究会を通じた専門分野別の利用者要求の把握の面でも、これが大いに役立っている。システム開発の工数からみると、プロトタイプ方式は無駄が多くなるような感じもしようが、実際にはむしろ効率的のように思われる。仮に従来型の開発方式で接近したとすれば、システム一式の開発後に、仕様変更・手直しを相当程度加えざるを得なくなり、これは結局工数的にも工期的にも不利であろう。

### 3. 研 究 会

検索システムの設計にあたって、何よりも優先されるべきは、実際の利用者の検索要求である。すなわち、各データベースの対象分野の研究者から、当該データベースをど

のような目的で検索し、そのためにはどのような検索手順が望ましいかなどの意見をもらい、これを設計に折込んでゆくことが肝要である。これに向けて、現在システムを開発しつつある各データベースについて専門分野の方々の知恵を借りるべく、データベースごとに研究会を組織した。Life Sciences Collection については、東大・大型計算機センター長・飯高教授に御協力いただき、薬学部・小林先生にも参加願っている。MathSci については、理学部数学科・小松教授の御協力にて、同学科・大島、丸山両先生に参加いただいている。Harvard Business Review に関しては、経済統計数値データベース日経NEEDSの応用とあわせて経済学部梅沢助教授に御意見をいただいている。ISTP&B、学術雑誌総合目録和文編およびMARCデータベースについては、内容が書誌情報であることから、当面センター内で検討を進められると判断して、研究会方式はとっていない。検索システムの外部仕様、ユーザー・インターフェース全般について、長期的視野も含めて検討を行うため、図書館情報大・山本、東大大型計算機センター・小沢両先生に御参加願って、もう一つの研究会を設けている。

これら研究会では、前項のプロトタイプ・システムを各メンバーに直接使ってもらい、データベースの内容確認と有効な検索キー、手順等に関する意見をいただいて、これを本格システム用の仕様に反映させるという段取を念頭に、当該分野における抄録誌利用の現状、データベース検索の有効性等の討論を重ねている。今後、議論の進展に応じて、さらに多くの方々に御参加いただくことになろうと思われる。

当面対象としているデータベースは内容的にも、またデータ記述の形式的にも各々独特のところがあって興味深いものではあるが、それだけに手間もかかるというのが実情である。この辺の状況については、別の機会に紹介してみることとしたい。

# 学術雑誌総合目録欧文編データ全国調査集計報告

## 目録情報係

昨年10月から今年の3月末にかけて学術雑誌総合目録欧文編新版データベースの開発のため、データの全国調査を実施した。全国の協力機関からのデータ提出は、3月下旬から4月下旬にかけてがピークであったが、5月以降も続き、データ提出機関のほぼ全機関が報告を完了したのは8月末となった。全体的にデータの提出がおくれぎみであったのは、従来の調査が所蔵データの点検を中心に行われたことに対して、今回の調査では未収録の書誌データの調査だけでなく、既収録の書誌データの点検が行われたこと、特に、今回の欧文編の調査がこれまでの自然科学編、人文・社会科学編、補遺版の3編を統合したデータベースの総点検であり、調査の対象となるタイトル数が過去に多く多かったことなどの理由によるものと思われる。結局、回収されたデータシートの量は、当初の計画を予想以上に上回り、とくに書誌データシートは、既収録誌の更新、修正分と新規登録分を合わせると11万枚以上にもなるなど、これまでになかったデータ量となった。最終的には所蔵データは80万件を越え、また、書誌データは10万件の大台にのる状況であり、前回の和文編データベースに匹敵する大規模な逐次刊行物総合目録データベースが形成されることになる。

参加協力機関の各担当者の方々のご努力により、このように大量のデータがよせられたことは、何よりも図書館間の相互協力活動にとって、大変重要なことであり、この調査に御尽力いただいた全ての人々に対して、謝意を表す。

現在、書誌、所蔵データシートとも編集作業が開始されているが、これまでの作業過程において、詳細に分析された数値をあげながらデータの集計報告としたい。

### 1. 調査機関及び回答機関数

		調査対象	回答数	備考(回答比率%)
大 学	国 立	95 ( 3,696 )	95 ( 3,696 )	100 %
	公 立	34 ( 312 )	33 ( 309 )	100 %不参加通知1
	私 立	331 ( 757 )	316 ( 742 )	96 %不参加通知1
(小 計)		460 ( 4,765 )	444 ( 4,747 )	97 %
各省庁所属研究機関, 地方公共団体, 公社, 法人, 学協会		193 ( 202 )	151 ( 156 )	84 %不参加通知14
合 計		653 ( 4,967 )	595 ( 4,903 )	94 %

(注) 集計は8月末現在のもの

( ) 内の数字は所蔵館室数を示す

## 2. 月別回答数

	大 学			各省庁所属研究 機関，地方公共 団体，公社，法 人，学協会	計
	国 立	公 立	私 立		
昭和60年11月			1	3	4
12月	1	1	3	4	9
昭和61年1月	2		14	8	24
2月	4	1	22	10	37
3月	28	13	118	55	214
4月	47	18	134	55	254
5月	5		7	9	21
6月	5		8	2	15
7月	1		6	3	10
8月	2		3	2	7
合 計	95	33	316	151	595

(注) 集計は8月末現在のもの

## 3. データ数

## a. 所蔵データシート

		所蔵データシート (更新用)		所蔵データシート (追加用)		計	
		配布枚数	回収枚数	配布枚数	回収枚数	配布枚数	回収枚数
大 学	国 立	枚 17,279	枚 11,495	枚 18,891	枚 7,913	枚 36,170	枚 19,408
	公 立	1,719	1,221	1,581	872	3,300	2,093
	私 立	10,450	7,514	10,433	6,487	20,883	14,001
(小 計)		29,448	20,230	30,905	15,272	60,353	35,502
各省庁所属研究 機関，地方公共 団体，公社，法 人，学協会		2,452	1,716	2,168	1,099	4,620	2,815
合 計		31,900	21,946	33,073	16,371	64,973	38,317

(注) 集計は8月末現在のもの

回収された所蔵データシート(更新用)の枚数が配布された枚数より大幅に少ないのは、今回の調査では、医学図書館協会の協力により、医学雑誌総合目録外国雑誌編第7版のデータを利用してデータの調査を行うこととしたため、同協会に加盟している機関について

は、所蔵データシート（更新用）の提出を必要としなかったことによる。さらに、データの提出を磁気テープで報告した機関があったことなどの理由からである。

磁気テープによる報告は以下のとおりであった。

		機 関 数	所蔵館室数	レコード数
大 学	国 立	16	432	70,852
	私 立	8	74	18,593
研 究 機 関 等		1	1	2,083

所蔵データの磁気テープによる報告は、従来の固定フォーマット方式に加え、今回初めて可変フォーマット（個別版磁気テープ形式）方式が採用されたが、この方式では、国立大学の2機関（いずれも特定の館室のみ）から報告があった。

所蔵データには、OCRシートで報告されたもの、磁気テープにより報告されたもの、書誌データシート（追加用）の新規登録分として報告されたもの、さらに、医学図書館協会から報告されるものなどがあるが、現在、OCRシートのみデータのチェック及び修正作業が開始されている。

これまでに判明したエラーの状況を以下にまとめた。

所蔵データシート （更新用、追加用） 枚 数	OCRシート 読 取 レコード件数	エラーチェックの結果	
		正常データ	エラーデータ
37,670 枚	674,788 枚	614,392 件	60,396 件

（注） ここでの所蔵データシートは、7月末の集計である

項番	エ ラ ー 内 容	件 数
1	館室番号のエラー	2,720 件
2	誌名番号及び確認コードに関するエラー	26,655
3	巻次データのエラー	14,101
4	年次データのエラー	3,165
5	指示子、行継続及び巻次変更に関するエラー	21,360

項番1～5のエラーのほとんどが人の手により一点一点が修正されていくが、センター側で修正できないものについては、次回の確認調査にまわされる予定である。ただし、項番2のエラーについては、今回の調査で初めて採用した確認コードによる誌名番号の回復方式により、ほとんどが回復可能となる見込みである。

## b 書誌データシート

		書誌データシート (更新用)		書誌データシート (追加用)			計	
		配布枚数	回収枚数	配布枚数	回収枚数		配布枚数	回収枚数
					新規登録分	データベース修正分		
大学	国立	43,326枚	42,123	30,480	12,244	3,165	73,806	57,532
	公立	3,229	3,097	2,930	1,178	244	6,159	4,519
	私立	27,674	26,741	34,808	19,434	1,523	62,482	47,698
(小計)		74,229	71,961	68,218	32,856	4,932	142,447	109,749
各省庁所属研究機関, 地方公共団体, 公社, 法人, 学協会		2,876	1,694	6,468	2,319	362	9,344	4,375
合計		77,105	73,655	74,686	35,175	5,294	151,791	114,124

(注) 集計は8月末現在のもの

## イ. 書誌データシート(更新用)

今回の調査では先に述べたように、既収録の書誌データの総点検を行った。

この調査は、今回の欧文編プロジェクトにおいて初めて採用した方式で、既収録の書誌データについて1書誌1館を原則として、初号を所蔵する館、所蔵巻号の多い館等の条件により、調査を依頼する館を選び、共同分担目録方式という形で書誌データの総点検を行うものであった。

回収された書誌データシート(更新用)は、現在、以下のように分析され、それぞれのラインにのせられて編集作業が行われている。そのうち、項番1のデータシートについては、磁気テープ化がほぼ完了した。

項番	作業分析内容	件数
1	データベースを更新するデータとして採用するもの	45,872枚
2	「所蔵なし」のメッセージがあるもの	17,000
3	修正欄に全くデータのないもの	4,300
4	所蔵しているものと同定不可能なため、更新データのないもの	2,100
5	原本と思われるデータを複製版として修正されているもの	839
6	「調査不能」のメッセージがあるもの	200
7	その他(雑多なメッセージ付)	985
	合計	71,296

(注) 集計は7月末現在のもの

この表が示すように、書誌データシート（更新用）の回収率が非常に高かったにもかかわらず、項番1のデータベースを更新するためのデータが予想以上に少なかった。このことについて、報告された各データシートの傾向から、以下の理由が考えられる。

- ① 今回の調査では、前回の和文編プロジェクトと同様に、原本と複製版を別の書誌とする（これまでの欧文編では統一されていない）こととしたため、原本（現データベース内では複製版の版表示のないものは原本とした）を「所蔵なし」とし、その代りに複製版の記入を追加の書誌データシートとしてあげているものが多数あった。
- ② 欧文編データベースには10年以上も改訂されていない部分があり、既に廃棄されたものや不明のものが多くあった。
- ③ 統合された3編データベースのデータ記述が統一されていないことや、データの項目数が少ないために、書誌の同定ができないとしたものがあった。
- ④ 採録対象外として指摘されたものがあった。具体的には、図書、和雑誌、華韓ものであり、その他に独自の巻号体系をもたない「Index」、「Supplement」の類である。
- ⑤ 3編の統合による影響か、データベース内の似た書誌（双子）の指摘も多くあった。
- ⑥ また、とくに項番3では、データベースを更新すべきところがない、としたものの他に、作業の方法がわからないとか、作業が全くされていないものなどがあつた。

この調査では、現データベース（9万点のデータがある）の85%を調査したに過ぎない。全データを調査できなかった理由は、この調査は所蔵データから調査依頼先を選択したが、現データベース内の自然科学編のデータが最新誌名記入であったため、所蔵データのない書誌データが多くあつた。また、もともと所蔵データのない書誌データが存在していたことなどによる。結局、現データベースの書誌データが更新される量は、全体の60%の見込みである。

#### ロ. 書誌データシート（追加用）

回収されたデータシート （7月末現在の集計）	新規登録分	複製版の版表示をもつもの 14,208枚	既収録書誌データの書誌レコード番号をもつもの 12,294枚
			既収録書誌データの書誌レコード番号をもたないもの 1,914枚
	32,583枚	複製版以外のもの 18,375枚	変遷注記をもつもの 8,424枚
			変遷注記をもたないもの 9,951枚
40,027枚	修正データ	既収録データの修正分 3,094枚	変遷に関係のある修正 551枚
			変遷に関係のない修正 2,543枚
	3,444枚	別編収録データ 350枚	変遷に関係のある修正 200枚
			変遷に関係のない修正 150枚
新規登録すべきか否かの検討を要するもの			4,000枚

回収されたデータシートは上記の表のように分類され、編集の初期作業が行われている。新規登録分はさらに4つに分類され、現在は、その作業も終了し、磁気テープ化がほぼ終

了している。修正データは、当センターのオンライン目録システムによって作業が進められる予定である。

今回の調査要項では、複製版については変遷情報をもたなくてよいことになったが、実際には複製版の中には変遷情報をもつもののがかなりあり、現段階においてはそのまま編集作業を進めるとして、今後、原本と複製版の変遷情報をどのように管理していくかを検討する必要がある。

#### ハ. 変遷データシート

		変遷データシート	
		配布枚数	回収枚数
大 学	国 立	9,171 枚	4,384 枚
	公 立	670	196
	私 立	7,140	2,649
(小 計)		16,981	7,229
各省庁研究所属研究 機関, 地方公共団体, 公社, 法人, 学協会		2,080	563
合 計		19,061	7,792

(注) 集計は8月末現在のもの

報告された変遷図の中には、既登録変遷図の結合を指摘したものがあつた。この原因として、3編の統合及び最新誌名記入方式から個別誌名記入方式の見直しなどが考えられる。その他に、全く同一の変遷図（ファミリーの双子）ではないかとの指摘もあつた。

一方、回収された変遷図の中には、副誌名が変化しただけで変遷とみなされたものや、ジェネリックタイトル以外のタイトルで、団体名の変更があれば変遷とみなしたものなどがあり、変遷データベースの編集作業において、今後慎重に作業を進める必要がある。

## 総合目録データベースの個別版提供について

システム業務係

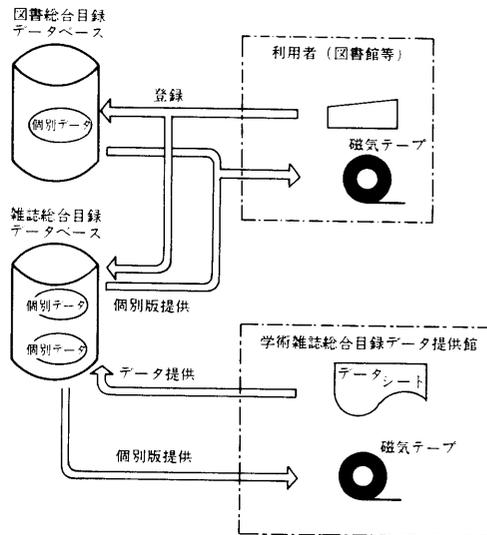
### (1) 概 要

総合目録データベースの個別版とは、センターの総合目録データベースから利用者（図書館等）単位の書誌及び所蔵データを抽出したものです。総合目録データベースには図書と雑誌があり、その各々について和と洋があります。

図書の総合目録データベースは、目録所在情報サービスを利用者（図書館等）が利用することによって蓄積されます。これに対して、雑誌の総合目録データベースは、「学術雑誌総合目録の編集（欧文編，和文編）」によって作成されたデータベースを初期データとして運用しています。目録所在情報サービスの利用者（図書館等）は、この既に蓄積されている雑誌の総合目録データベースに自館に必要な書誌，所蔵データを追加，蓄積することができます。

本センターでは、これらのデータベースから目録所在情報サービスの利用者（図書館等）の要求に応じて当該館のデータを磁気テープで提供しています。

なお、雑誌の総合目録データベースは、学術雑誌総合目録のデータ提供館であれば、個別版を提供しています。



総合目録データベースの個別版提供の概要

### (2) 手 続 き

申請書の提出先は、下記のとおりです。

〒112 東京都文京区大塚3-29-1

学術情報センター システム・データベース課 システム業務係

問い合わせ先 電話 03 (944) 7117

### (3) 磁気テープ記録方式

記録密度：1600 bpi, 6250 bpi

ラベル：NL（ノンラベル）

データコード：NVT（シフトコード付き）

レコード形式：VB（可変長ブロック化レコード）形式

レコード長：4096 バイト（MAX）

\*：N-1 プロトコルで採用している文字コード体系で、ほぼ J I S に準拠している。とくに拡張文字（E X C）コードが外字領域に割付けられている。

### (4) 磁気テープ・フォーマット

磁気テープ・フォーマットは、磁気テープ発送時に同封します。

見本

## 総合目録個別版提供申請書

学術情報センター所長  
猪瀬博殿

利用代表者

印

利用者	名称				組織コード						
	所在地	〒									
連絡担当者	職名		氏名		TEL						
利用目的											
申請区分	<input type="checkbox"/> 学術雑誌総合目録和文編				磁気テープ 記録密度	<input type="checkbox"/> 1600BPI					
	<input type="checkbox"/> 学術雑誌総合目録欧文編					<input type="checkbox"/> 6250BPI					
	<input type="checkbox"/> 定期版サービス (センター接続館に限る)				定期版サー ビスの間隔	<input type="checkbox"/> 週一回 <input type="checkbox"/> 月一回					

セン タ ー 入 欄	受付日	昭和 年 月 日	受付番号	
	作成日	昭和 年 月 日	担当者	
	発送日	昭和 年 月 日	備考	

上記の申請書について、下記の条件を付して承認します。

学術情報センター所長  
猪瀬博

## 記

1. 個別版ファイルの利用については、無償とする。ただし、個別版ファイルの引き渡しに要する費用については、利用者において負担すること。
2. 個別版ファイルは、善良な管理者の注意を持って管理し、その効率的使用に努めなければならない。
3. 個別版ファイルは、転貸または担保に供してはならない。
4. 個別版ファイルは、利用目的以外の目的のために使用してはならない。
5. 個別版ファイルを利用して作成した目録等の印刷物、または研究成果の報告書等1部を完成後速やかに、学術情報センター所長へ提出すること。

## 学術情報センター・創設記念パーティー

学術情報センター・創設記念パーティーは、7月11日（金）、海部前文部大臣をはじめ文部省及び国公私立大学関係者等約300人の出席のもと、一ッ橋の如水会館で開かれた。

最初に、猪瀬所長からセンター設立の経緯、事業内容の説明等があった後、海部前文部大臣から祝辞が述べられ、続いて岡本道雄学術情報センター評議員会議議長（臨時教育審議会議長、科学技術会議議員）の発声で乾杯し、歓談に入った。さらに、森東京大学総長潮三菱電気株式会社副社長、M. M. Venning オーストラリア大使館科学参事官、倉成衆議院議員（現外務大臣）からそれぞれ祝辞が述べられ、最後にセンターの今後の躍進を祈念して散会した。

## 第1回総合目録データベース実務研修終わる

### 研修・資料係

昭和61年4月に学術情報センターとなり、東京大学文献情報センター・データベース担当者養成研修も名を改め、学術情報センター・総合目録データベース実務研修となった。研修期間も11週間から8週間に短縮して密度の濃い研修とした。

本センターでは、目録所在情報データベース（総合目録データベース）の作成に必要な高度な知識、技能を備えた目録データ入力担当者を各図書館に育成するばかりでなく、自館の職員にも指導出来る人材を養成するため、目録システムの実習を主体としたのがこの実務研修である。

昭和61年度第1回総合目録データベース実務研修は、昭和61年5月27日から7月21日までの8週間にわたり実施された。

資格は原則として、本センターと接続または接続予定の国・公・私立大学図書館に勤務する者で、所属機関の長の推薦する者である。今回は東北大、新潟大、東京大、京都大、大阪大、兵庫教育大、熊本大、慶応大の8大学11名の図書館職員が参加して行われた。

研修内容としては

- ① 講 義：学術情報センターシステムに関する講義。
- ② 目録実習：学術情報センターシステムの操作法及びデータ作成演習等。
- ③ 実 習：業務モードによる総合目録データ作成と、その入力データの点検、及びデータチェックの方法を検討する。
- ④ 演 習：自館での目録作業に学術情報システムを利用する場合の、入力規則及びその適用法並びに出力の在り方について個別に検討する。

## 既接続図書館だより

### 富山大学附属図書館の接続現状

富山大学附属図書館学術情報係長

きよう   とう                   とおる  
京   藤                   貫

富山大学附属図書館は、61年3月28日、本学情報処理センターのホストコンピュータ（FACOM M360-AP）を経由し、N1ネットワークによって学術情報センターと接続した。ILISというパッケージをベースに進めてきた図書館システムのうち、閲覧、図書目録作成、目録検索が稼動して丁度1年経っており、データベースには、ILISで作成された図書目録データが初期データを含めて既に7万件蓄積されていた。当初、不安定だったILIS目録作成もバージョン・アップを重ね、係員もシステムに慣れ始めた頃であった。このような状況を踏まえ、次のような運用方針をたてた。

- ① 図書目録作成業務をILIS目録作成からNC図書目録登録システムに切り換える。
- ② システムの二重化を避けるためILIS目録作成との併用は必要最少限に留める。
- ③ ILIS目録検索やILIS・DBはそのまま継続する。（すなわち、入口は変更するが器や出口は変更しない。）
- ④ 接続形態はCASE2とし、作成したデータはNCに送信するとともにILIS/NTユーザ（UIP）およびその付帯プログラムであるILIS・DB一括登録ユーティリティ（変換ソフト）を介して富大書誌・所蔵DBに変換のうえ取りこむ。

以上について、変換ソフトの安定、担当者の習熟度を見計って段階的に実現し、結果的にNCの書誌ユーティリティ機能の恩恵を十分に享受することによって整理作業の促進を導くとともに、全国的総合目録システムにも寄与する（GIVE&TAKE）、しかもそれらを日常の整理作業の遅滞を招くことなくできるだけ円滑に行うというのがおおよその目論見であった。数ヶ月を経過した現在、上記の方針は多少の検証を受けたわけであるが、以下その現状および問題点について語りたい。先の4項は相互に関連し合った、いはば一つの事柄なのであるが、整理のために分けて論じることとする。

#### <①②のNCシステムへの切り換え、ILISとの併用について>

データベースへの入口がNCシステムに一本化された場合をシステムの最終形と言ってもよいと思うが、その実現はUIPに富山大学DBを検索・更新する機能が付加される（CASE3の実現）まで待たなければならない。今のところ、UIPが富山大学DBになしうことは、一方通行にすぎず、NCのVSデータと若干のローカル項目をLSAVEでできるだけなので、過去7万件のデータと整合性を保とうとする限り、複本調査、同定、引用、修正などはILISで行わざるを得ない。また、「固有の書名のある多巻物」のケースのように、NCが書誌構造の概念をとっているために当館との間で目録法が異なり、かつ変換ソフトでも充分に対応しきれていない場合などは、当面ILISで入力するか、NCで入力した形をそのまま採用するか、NCで入力した後ILISで修正するかといった選

択の問題が生じている。件名のヨミ、外来語のヨミ、韓国・朝鮮・中国人名の形などについても同様の問題があるが、これらについては、特に I L I S で追加・修正する手数はかけないことにしている。このほか、N C システムの使い勝手も大いに関連するところであるが、ここでは、書誌構造の複雑なものは敬遠されがち、その他についても賛否両論があると言うに留めておきたい。

### ＜③の検索システムやDBの継続について＞

N C からのデータとりこみを容易にするには、N C に合わせてデータベース等を変更する方法と、それらはなるべく変更せず、代りになるべく精巧な変換システムを設ける方法が考えられる。当館では後者を選択した。理由は、①既に稼動しているシステム全体に対する影響が少ない。②過去のデータを再編成する必要がない。③メーカー提供の変換ソフトが不十分ながら既にある。そして、何よりも、④N C システムの検索が可能であるのに N C と類似の検索システムやDBを持つ必要はない。N C と別個にシステムを持つ以上、独自のものを持つ方がよいと判断したからである。

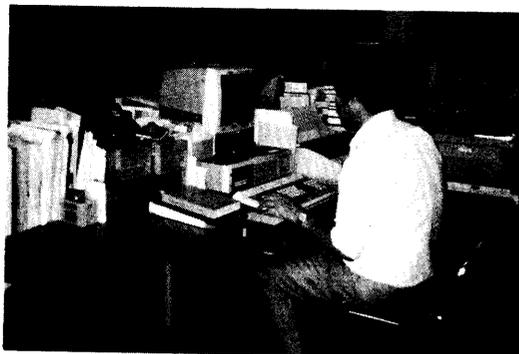
従って、書誌構造リンクや典拠コントロールまでは行っていない。それらが必要なときは N C を検索すれば足りると考えている。

ただ、データベースの方を変更した例として次の場合がある。「固有の書名のない多巻物」などは N C では 1 レコードにまとめるのに対し、I L I S では物理単位ごとに別レコードを作る。これについては、未完記入の多い多巻物レコードを分解すると不完全なフィールドができるので、1 レコードのままとりこめるように I L I S ・DB を変更した。

### ＜④の変換ソフトについて＞

U I P の出口ルーティンからローカルコマンドで仮登記ファイルにとりこんだ V S データを、I L I S ・DB に一括登録した後、キーワードを切り出すまでの機能を備えている。3つのステップから成り、Step 1 で、仮登記ファイル内データの整合性チェック、個別版磁気テープフォーマットへの変換、作業ファイルへの登録を行う。Step 2 では、I L I S ・DB にフォーマット変換のうえ、登録する。このとき、階層構造をもったレコードの個別記入方式への変換、エリア単位データの要素単位への分解、カナ読みのローマ字への変換などを行う。Step 3 でキーワードの切り出しを行い、検索が可能となる。

接続当初は Step 2 以降が制限事項となっていたため、I L I S ・DB へも本番登録ができず、いはば N C、ローカルともに教育用の時期が続き、係員の志気をそいだ感があったが、現在は盛んに登録し変換状況を確認している段階である。一言で言うなら、「完全ではないが利用に耐える」といったところである。詳述は避けるが、当初次のような点が問題になっていた。①固有の書名のない多巻物について N C は一括記入、I L I S は分割記入であるためとりこみができない。②ローマ字への変換をキーワード切り出しのときに行っていたため、DB にはカナのまま入ってしまう。③「構造の



FACOM 9450—IIによる入力風景

種類」をチェックしていないため各巻書名に入るべきものも本書名に来てしまうなどである。先述したように、㊶㊷については、ほぼ解決されており、㊸については今後の課題となっている。

このほかにも問題は残っているが、最後に若干の感想を述べて本稿を終えたい。今後、目録作成の担当者は、①自館の整理業務と同時に、②総合目録の形成業務も行うことになる。いはば使命が一つ増えたと言ってよい。①で主に要求されるのは、迅速さであるが②では目録の質が要求される。また、NCのデータは、②ではその形成自体が目的であるのに対し、①では一つのツールにすぎない。しかも担当者の意識はどうしても①に流れがちである。最初に述べた構想は未だ道半ばであるが、それがNCシステムともども成就するには、UIPや変換ソフトの改良は勿論、担当者の自覚と、それを支えるNCの側での運用マニュアルの整備なども必要ではないだろうか。

## 昭和61年度文部省科学研究費補助金採択課題一覧

昭和61年度、学術情報センター関連の文部省科学研究費補助金採択課題は次のとおりである。

### 科学研究費

(単位：千円)

区分	研究課題	研究代表者 職・氏名	交付決定額
特定研究 (1)	学術用語制定のための最適手法の開発とその高度利用に関する研究	学術情報センター研究主幹 井上 如	14,000
総合研究 (A)	学術情報ネットワークにおける密結合型図書館システムの諸機能の高度化とその応用	東京大学工学部教授 猪瀬 博	12,800
一般研究 (C)	時間論理に基づく通信規約記述言語に関する研究	学術情報センター助教授 浅野 正一郎	500
〃	学術情報システムにおける総合目録の機能と運用に関する研究	学術情報センター助教授 内藤 衛亮	800
奨励研究 (A)	オンライン原文書アクセスのための画像通信システムの研究	学術情報センター助教授 橋爪 宏達	900
試験研究 (1)	ネットワーク接続可能な高性能ワークステーションの開発	東京大学工学部教授 猪瀬 博	7,900
海外学術調査	学術情報システムの構築に関わる海外データベース事情調査	東京大学工学部教授 猪瀬 博	8,000

### 研究成果公開促進費

区分	データベースの名称	作成代表者 職・氏名	交付決定額
データベース	電気関係preprint 情報データベース	学術情報センター研究開発部長 市川 惇信	7,510

## 成蹊大学図書館の電算化の現況

成蹊大学図書館総務係

お お い と し あ き  
大 井 敏 暉

現時点では、NC接続については始まったばかりであるため、自館システムのことを中心に報告したい。

成蹊大学図書館では、現在、大学情報処理センターの計算機を使用し、富士通標準パッケージ I L I S のうち閲覧、目録、検索、N V T からなる4つのサブシステムを稼働させている。

当館は、トータル・システムの段階的達成を目指しており、現システム以前にその第1段階として成蹊大固有の運用業務システム（固定長。英数字カナによる書誌登録、検索を含む）を稼働させてきた。

昭和60年9月、センターの機種が三菱から富士通に変更されるに際して、将来のNC接続、目録の漢字化、可変長データ処理等を考慮し、当館ではパッケージ導入を決定した。導入パッケージは、コンバージョン対象となる閲覧、目録、検索の3つである。併せて前システムのバッチ・プログラムのコンバージョン、J P / M A R C の取込み、および標準カード体の採用を決めた。これは、当館のトータル・システムへ向けての第2段階であるとも云える。

コンバージョン作業は、昭和60年3月より仕様書作成を開始、データ・コンバージョンを終了させ、予定どおり昨年9月にオンライン系を稼働させた。付帯バッチ作業の完了は今春、カード体は修正を施して今年8月に完了し、現在、システムの正常運用をみている。

J P / M A R C は、当面10カ月分で運用している。但し、これはNCデータ取込みが順調になるまでの暫定措置である。

当館では、I L I S はエンドユーザが使う業務システムとしては未だ改善検討の余地があると考え、メーカーと協議しながらメーカーにパッケージの改善を計って戴くとの方針を採っている。

I L I S 導入決定後、当初閲覧システムを最重要視し、前システムの経験をもとにメーカーにシステムの機能追加、修正を依頼、それらは年末にはほぼ完了し、以後安定稼働している。目録システムは、画面が階層構造になっており画面数が多いことと館員の端末操作の不慣れにより、導入当初1カ月位は使いものにならず、また画面展開、登録に時間のかかるものであった。端末操作に慣れてくるとバグが見つかり、また使い勝手の悪いところもあるため、メーカーに修正、機能追加の申し入れを種々行い改善してもらうことにした。それらのソフトが5月にインストールされるまで、バッチ修正のテストランによる待ちに対する不満と相乗作用を起し評判は芳しくなかったと云える。新ソフトになってからは、応答も速く、大幅に改善されてきたが、6月にさらに修正を行ってもらい、7月からは、業務として充分耐えられるようになってきている。検索システムについては、今年の秋から試験的に開放し、来年度から一般に開放する計画をもっており、そのため目下その面からシステムおよびデータの調査を行っているところである。

NCとの接続に関して当館は、学術審議会答申の頃からNC構想に着目、推移を見守り、それが実現化した段階でのネットワーク参加を検討してきた。機種変更時契約には、NC接続ソフトNVTが入っていないため、NCおよびILISの進捗状況を考慮し、昭和61年度ML接続(ケース2)を決定、大学に対し昭和61年度予算申請を行った。予算承認後、メーカーに対しソフトの修正を申し入れ、新規資料のみならず自館DBにある全資料に対しNCデータの取込みができるようにすることを依頼した。回線については、専用回線を採用している。これは将来情報検索が増大することを予想し、近距離の場合の安価な通信料金を考慮したことによる。



整理係設置の目録端末

昭和61年4月4日接続テストが完了、ケース1がスタートし、8月1日よりケース2によるNCデータの自館DB取込みが可能となっている。現在のところNCデータが、ILISにどのように取込まれるのか、データの整合性をチェックしているところである。チェックが終了した段階で、教育モードから業務モードに切り換え、ネットワーク参加に駒を進める予定である。

昨秋以来、実業務としてパッケージを導入してきたが、ここまでくるとは予想以上に大変なことであった。ソフトウェア、データ入力、図書館業務とセンターとの関係等々に様々な問題が発生した。問題が解決したものもあれば、今後取組むものもある。これらの発生する問題に対して一つ一つ現実的に即して対策を練り解決していかなければならず、目下努力している。これらの問題を解決することにより、導入したシステムが生き、業務の機械化をより促進させ、延ては図書館の活性化に繋がることになる。

最後にシステムの修正、追加に積極的に協力下さった富士通およびメンテナンスを受持つFHLのSEに対し、誌上を借りて厚くお礼を申し上げたい。

ホスト機種 M 360 (MEM 20MB) 図書館用ディスク容量 1.3GB

	端 末			塔 載 ソ フ ト				
	機 種	容 量	台 数	閲 覧	目 録	検 索	NVT	その他
閲 覧 係	9450-II	10MB	2台	○	○	○		
	9450-II	10MB	1台					○
参 考 係	9450-Σ	20MB	1台				○	
	9450-II	10MB	1台	○	○	○	○	
整 理 係	9450-Σ	20MB	2台				○	
	9450-II	10MB	4台	○	○	○	○	
開 発 用	9450-II	10MB	1台					○
計12台			内訳	9450-II 9台	9450-Σ 3台			

使用機器 (1986. 8. 31 現在)

## タスクフォース奮闘記

### タスクフォースへの道

とう かい やす おき  
東 海 安 興 (長崎大学附属図書館)

「タスクフォースとして学術情報センターへ行ってみないか」という話に何故か「よろしくお願いします」の二つ返事でセンターに併任として勤務することになった。現在学術情報システムが全大学図書館の共通な課題であり、近々、我図書館でも避けて通れない問題になるであろう。この機会を逃しては将来、私が図書館員としてその時代への対応が果してできるであろうかと自問自答した結果なのである。センターで6ヶ月間、研修できることは自分を鍛え直す良い機会でもある。これが好奇心だけは一人前の私がセンターのタスクフォースの一員となった動機である。

さて、タスクフォースは現在8名(男性6名、女性2名)で、年齢も20代~40代までと幅広い構成であり、有機的に活動でき、和が保たれているのかもしれない。我々は目録情報係に配属され、業務分担でチーム編成がなされている。私は研修、講習会に関連する業務を担当している。現在、講習テキストの作成に取りかかったところである。又センターにいろんな開発部会(サブプロジェクト部会)があるが、私はIRシステム開発部会に配属され、業務を行い、会議にも出席している。特に来年公開予定のデータベース(Life Science Collection, ISTP & B, MATH等)のFieldチェック等を行えたことは幸いであった。IRシステム構築の難しさと魅力を感じた次第である。タスクフォースで毎週定例会を開き、お互いの貴重な業務内容を報告しあい、資料等を配布するなどして効率良い勉強会の場にもなっている。

最後にこのセンターでの研究成果を図書館業務に活用することが私の今後の課題であり、お世話になったセンターへの恩返しになると思う今日今頃である。

### 「スイカナ」「RETURN」

あり ま ひて こ  
有 馬 秀 子 (愛媛大学附属図書館)

「スイカナ」にあわて、「重大エラーが発生しました」に戸惑いながら始まったセンターでの生活も残り少なくなりました。

季節はすでに満開の桜から、涼やかな虫の声へと移っています。

慣れない生活と全く異なった職場環境の中で困惑することばかりでしたが、与えられた仕事と正面から向い合うことによって少ずつですが、センターの様子もわかってきました。

まだ目録システムへの理解が乏しい頃から始まったシステムのチェックや目録講習会の補助、そしてオンライン目録システム改善のための会議、会議、接続館から寄せられる質問の分類・チェック・回答・整理、その合間をみて夜毎行う学総目データシートのチェック作業、システムの負荷テスト、それに接続館から要望の出ているマニュアルのこと等々センターでの仕事は止まることはありません。

少し遠慮がちに、しかも積極的に仕事することの難しさを味わいながらも、私達タスク

フォースの仕事を評価して下さるセンターの方々に励まされ、タスクフォース仲間の一生懸命な姿に刺激されての半年間は私にとって貴重な体験であるとともに、新しく発足した「学術情報センター」の開所式、IFLA東京大会展示会場のデモ等と合わせていつまでも忘れることはないと思います。

残された日もあわただしく過ぎて行くことと思います。あせりと何か忘れ物をしているような気がしないでもありませんが、最後はしっかりキーボードを見てコマンドを入れます。

「スイカナ」、あっ、またまちがった「RETURN」。

### 「タスクフォース奮闘記」

あお やま いさお  
青山 功 (大阪外国語大学附属図書館)

私は進歩性のある人間が好きであり、進歩性のない人間には何等魅力も感じない。学術情報センターにタスクフォースとして来て以来、私自身ナチュラルに進歩性のある人間に形づけられたように感じられる。

タスクフォースに向けられたセンターの研修方針は「習うより慣れよ」の一言に尽きる。タスクフォースに来て学術情報システム全般について教授してもらうという発想は持たない方がよい。殆んど本センター内での各種業務を実習するOJTであり、そこから知識を得ていくというやり方である。これは、非常に厳しい反面最も力がつく方法である。ゆえに、タスクフォース各々が何の目的でセンターに来ているのかという目的意識を常にもつ必要がある。日々単位、週単位で与えられた個々の複数の業務を消化するだけではセンターのシステムやデータベースの構築、運用、拡張の知識を得ることが出来なくなってしまうので他のタスクフォースの業務を常に積極的に認識する必要がある。結論づけると、積極的に行動すれば非常に身につく研修である。

センターでの180日間の業務において、陽のある間に帰路につくことはなかった。家に着けどもカルチャー・ショックをアゲインする3畳1間の生活空間が待つだけであった。

多少寝れはしたが、何とか180日間持ち堪えることができた。私の進歩性を発揮することは、今後、学術情報センターと私のリンクづけを密にすることによって表れるであろう。

### 挨拶

ま なか すずむ  
真中 進 (静岡大学附属図書館)

初日、生乾きのコールドールに足を突っこみ、当センターに否応もなく足跡を残す。

1ヶ月を経ずして、目録端末なるものが秀れた催眠術者であることを知る。おかげで、日中不眠症にかかることはなかった。

残業時間数は4月が19、5月が57、6月が87、7月が95.5、8月が51。ならせば1月あたり61.9時間。図書館系タスクフォースの中にあって、その短さは1、2を争う。

かかる労働の結果、大半はゴミ箱行きとなった膨大な紙の束と、そのエッセンスたる文書フロッピー1枚が生み出された。

図書館員といえど、タスクフォース経験者ならば、プログラム等おちゃのこさいさい、システムの一つも組めないでか、といった世間の誤解もとけつつあるが、私の場合ことはさらに明快である。その証拠に、システムエンジニアに坊主頭は極めて稀ではないか。

なお、端末の操作が粗暴な割には、目録システム、特にILLシステムにさしたる被害を与えなかったことは、誇ってよいかもしれない。

今、この人足寄場でのつとめを了えるにあたり、センター教職員並びに後に残る、そして今後新たに加わられるタスクフォースの方々に、自分が事態の改善にこれといって寄与しなかったことを謝しつつ、次の言葉をおくりたい。

「お先に失礼します。あとは宜しく。」

あ あ し ん ど

おか もと まさ き  
岡 本 正 貴 (愛知教育大学附属図書館)

×月×日

初仕事は、センター開所式の手伝い。春風にはほど遠い突風が吹きまくる中、公用車が来るのを待つ。砂ぼこりが目に痛かった。

×月×日

1日中ディスプレイを見続ける。目録システムのチェックのはずだが、実際は何をしているのやら。キーボードを枕にして眠るとどんな夢を見るのかな……と隣の人をそっと見る。

×月×日

各自の役割り分担が決まる。学総目の方に決まった。一体、何をやるのだろう。

×月×日

負荷テスト。講習室に集まり、さて一斉に立ち上げてテスト開始、というまさにその時落雷！あまりのタイミングの良さに、一同呆然（爆笑）。が、不死身(?)のセンターは電源を復旧して、1時間半後にテスト再開。嗚呼。

×月×日

今日も学総目のデータシートで明け暮れる。「火をつけてやりたい」とボヤキながらもみなさんよくやる。

×月×日

IFLAのデモで、ホテル・ニューオータニへ行く。喉が痛い。あの説明で何人がわかっただろう。不安。

×月×日

この原稿を書きながら、センターで過ごした日々を振り返る。そして、帰ってからやる仕事に想いをはせる。しばらく後、現実に戻って、原稿の清書にとりかかる。ああしんど。

#### <訂正とお詫び>

前号9頁、「学術情報センターの発足を喜ぶ」で、熊本大学長松山公一氏のヨミがまちがっておりました。(まつやまきみかず)に訂正させていただき、つつしんでお詫び申しあげます。

## 接続ニュース

### 群馬大学附属図書館が接続

去る9月10日、新たに群馬大学が本センターとの接続を完了し、目録所在情報サービスの利用を開始いたしました。これで本センターとの接続大学は、国立14、私立3の計17となりました。

### 第1回評議員会議

学術情報センター評議員会議が6月27日（金）に開催された。

会議は、本センターが創設されて最初の開催であるため、猪瀬所長挨拶、議員及びセンター側出席職員の紹介が行われた後、議長及び副議長の選出に入り、議長に岡本道雄評議員（科学技術会議議員）、副議長に稲田獻一評議員（大阪大学社会経済研究所教授）が選出された。

続いて、議長が欠席であるため、副議長司会の下に議事に入り、猪瀬所長からセンターの概要説明があった後、「諸規則の制定、事業計画等」について審議が行われた。

議題は次のとおりである。

◎ 学術情報センター概要説明

1. 諸規則の制定等について
2. 昭和61年度事業計画について
3. 昭和62年度概算要求について
4. その他

### 第1回運営協議員会議

学術情報センター運営協議員会議は6月30日（月）に開催された。本会議は、評議員会議と同様に、センター創設後初めての開催である。

最初に、猪瀬所長の挨拶並びに、議員及びセンター出席職員の紹介の後、議長及び副議長の選出が行われ、議長には、市川惇信運営協議員（学術情報センター研究開発部長）、副議長には、津田良成運営協議員（慶應義塾大学文学部教授）が選出された。

続いて、議事に入り、猪瀬所長からセンターの概要説明があった後、「諸規則の制定、事業計画等」について審議が行われた。

最後に次回会議を、昭和62年1月頃に予定し、閉会した。

議題は次のとおりである。

◎ 学術情報センター概要説明

1. 諸規則の制定等について
2. 昭和61年度事業計画について
3. 昭和62年度概算要求について
4. その他

## 学術情報センター日誌

昭和61年6月1日～8月31日

- 6.10 猪瀬所長，海外出張（スウェーデン，フランス）出発  
 6.14 市川研究開発部長，海外出張（スウェーデン，フランス）出発  
 6.20 猪瀬所長・市川研究開発部長，海外出張帰国  
 6.24 国連大学シンドラー局長，センター来訪  
 6.27 第1回評議員会議開催  
 6.30 第1回運営協議員会議開催  
 7. 2 衆議院文教委員会，センター視察  
 7.11 センター創立記念パーティー（如水会館）  
 7.22 オックスフォード大学ティトラー氏，センター見学  
 7.23 アメリカ議会図書館 吉村ヨシコ氏，センター見学  
 8. 5 学術情報センターシンポジウム開催（日本学術会議講堂）  
 8.18 ケンブリッジ大学図書館 小山膳氏，センター見学  
 8.20 FIZ KARLSRUHE イェンシュケ氏，センター来訪  
 西ドイツ各図書館（アウグスブルグ大学図書館他），センター見学  
 8.23 RLG マッコイ氏，センター見学  
 8.26 韓国公州師範大学 玄圭燮氏，センター見学  
 8.28 IFLA センター見学  
 8.29 ドイツェ・ビブリオテーク ケルム・バルバラ氏センター見学

## ＜目次＞

OCCLCの現状と将来 （ローランド C. W. ブラウン）…（1）	総合目録データベースの個別版提供に ついて ……（システム業務係）…（34）
第1回学術情報センターシンポジウム 開催 ……（7）	学術情報センター創設記念パーティー ……（36）
（報告1：井上 如）…（8）	第1回総合目録データベース実務研修 終わる ……（研修・資料係）…（36）
（報告2：小山弘志）…（11）	既接続図書館日より
（報告3：津田良成）…（14）	富山大学 ……（京藤 貫）…（37）
（報告4：福村晃夫）…（16）	成蹊大学 ……（大井 敏暉）…（40）
（報告5：山崎弘郎）…（18）	昭和61年度文部省科学研究費補助金採 択課題一覧 ……（39）
学術情報ネットワークの整備計画の概 要 ……（浅野正一郎）…（21）	タスクフォース奮闘記 ……（42）
情報検索システムの開発状況 ……（根岸 正光）…（25）	接続ニュース ……（45）
学術雑誌総合目録欧文編データ全国調 査集計報告……（目録情報係）…（28）	第1回評議員会議 ……（45）
	第1回運営協議員会議 ……（45）
	学術情報センター日誌 ……（46）

学術情報センターニュース（第2号）

1986年10月23日 発行

発行人 猪瀬 博

発行 学術情報センター 東京都文京区大塚3丁目29番1号（〒112）

電話（03）944-7115（直通） 共同利用係